くべきか、又如何にして死すべきかを教へ、予の憂鬱を去り予の心を爽快ならしむ」と讃美した。書籍は實に吾等の良友である、ジョン、ラボックはいふ「書籍は屢ば朋友に比較せらる、されど吾等が生ける朋友には死別を避くべからざるあれど書籍にありては之れなきのみならず。歳月は之れを淘汰して其の最良なるものを遺す」と、書籍は友にも優りて吾等を教へ吾等を慰むる人生の至寶である。

書籍と朋友

十四世紀の英國有名の詩人ジョフレー、チョーサーは「予の書籍を手にせざるは誠に稀れにして、僅に祭日を除くの外、書籍と相別るゝことなし」といひ、下て十七世紀の學者だるアイザック、バーローは「書を好む人は常に眞實なる朋友、親切なる忠告者、愉快なる伴侶、忠實なる慰藉者を缺くことなし、人は研究により讀書により思索により寒暖の別なく、運不運の別なく毎に無邪氣に己れを娯ましめて愉快に日を送ることを得るものなり」といふ、近世に至るに及びて歎美の聲は益大に哲人カーライルは其著英雄崇拜論中に「人間の地上に爲す所、造る所の中に重要、神異有効の遙に他に拔んずるものは所謂書

チョーサー

籍なり」と絶叫し「書籍を產出するは人間智能の最高なる運營なり」といひ、同じく「サートル、レザルタス」の中には「過去の見るべく觸るべき產物の中に三個のものあり、第一は官廳兵庫等を有する都府、第二は耕やせる田圃、第三は書籍、最後に發明せられし此の第三者は遙に他の二者に優る、眞正なる書籍の德は驚くべき哉、こは毎年修復を要する石造の死せる都府の如くならずして耕せる田圃の如し、然り靈的田圃なり、否な靈的の樹木の歷代相續くが如く、毎年註釋、推論、哲學上政治上の組織並に說教、小冊子等の新生の綠葉を生ず、これらは皆な神變にして人を動かす云々」と說き、有名なるマッコレー卿は人生の至樂を讀書にありとし、其の少女に與へたる書中に

汝が書籍を愛好するは予の常に喜ぶ所なり、汝も父の今の齡の如きに達しなば、汝は書籍の此の世の中に於て菓子よりも玩具よりも演劇よりも見世物よりも尙ほ好きものたるを知りたまはん、若し誰にてもあれ予をして世界始まりてよりの大王と爲し、宮殿庭園の美を盡くし、食卓は佳酒佳肴を以て飾られ、出るに馬車あり、着るに美服あり、數百の奴婢を與ふるを以

マッコレー

て、書を讀むなかれといふものあらば、予は王たるを辭すべし、讀書を愛せぬ王とならんよりは寧ろ屋根裏の小き室にても多くの書籍と共に貧しき人たらん云々

と、いひて、讀書の趣味を慫慂して居る、支那にあつては古來這般の語に乏しからず、劉勰の文心彫龍には「開闢草昧歲紀緜邈、今に居て古を識る其れ載籍か」といひ、楊循吉が書厨上に題する詩に

楊循吉

吾家本市人、南濠居百年、自我始爲士、
家無一簡編、辛勤一十載、購求心力專、
小者雖未備、大者亦略全、經史及子集、
無非前古傳、一々經紙裝、辛苦手自穿、
當怒讀則喜、當病讀則痊、持此用爲命、
縱横堆滿前、

高士廉

高士廉が文思博要の序には「大なる哉、文籍の盛なる、天地を範圍とし、神明を幽贊す、之れを邦國に用ふれば則ち百官以て乂し、之れを鄕人に用ふれば則ち百姓以て察す、松喬に非ずして振古に對し、戸牖を撻して幽遐を見る、故に先王之れを以て極を建て、聖人之れを以て敎を設く、百代を師範し、四海に瀰淪す、是を以て之れを金石に刊して天壤と與に敝せず、之れを竹素に書して日月と俱に懸る者、此より尙きはなし」と、書籍の功此の如く、其の樂みに至ては石天基の「天基樂事」の中に、

天基樂事

讀書は乃ち天下最樂の事、實に吾人終身の極大受用なり、夫れ書は聖賢の語言、古今の事蹟、一切の奇見異聞を載せて備らざる所なし、看ること一時にして千百年の事を知り、宛然古人と對晤し、其の詞章を諷誦し、其の義趣を尋討するが如く、學問日に深く、道理日に新なり、思者は之に因て而して賢、昧者は之れに因て而して明、其れ寒暑風雨黃昏清曉に於て世人を回想せば塵勞に碌々たり、而して予は一編と窓下に安然として古人に對す、眞に天淵の別あり、此等莫大の樂知らざるべけんや。

と、いへるありて古人が書籍を愛好せるの面影は、略ぼ上來拔抄せる諸家の言說によりて知ることが出來やう。讀書の利此の如く大に、其の趣味此の如

く深し。

二　讀書と活學

讀書の利大に趣味深きことは前節述ぶる所の如きも、これに耽溺するの弊は自修を妨げ人格を損することも少なくない、其の自修を妨ぐるといふは唯だ讀書の多きを貪りて得る所の智識散漫に流るゝの弊である。學修の身にあつては自ら課程に制限せられて、多くを貪り散漫に流るゝの弊は防遏せらるるが、自修者にあつては書籍の選擇全く自己の自由に屬し、よし其の選擇は他の指導に從ふも、讀むと讀まざるとは全く自己の自由なれば、甲卷終らざるに乙卷に移り、乙卷僅に手にして早や丙卷を取るの失態を敢てするを免れない。されば自修者に對する讀書の訓誡は散漫に書を讀むことなかれ、讀む所は必ず終あらしめよの二語を忘れざらしむるにある。古人既に之れを憂へて黄山谷は

散漫に流る

黄山谷

書を讀む精ならんを欲して博ならんを欲せず、心を用うる純ならんを欲して雜ならんを欲せず、讀書博を務むれば常に意を盡くさず、用心純ならざれば終に全功なし。

終あらしめよ

といひ、葛屺瞻の讀書法にも亦

讀書は心に雜なるを欲せず、雜なれば則ち神蕩して收らず、心又勞を欲せず、勞すれば則ち神疲れて入らず。

といひ散漫に書を讀むを誡め、ロバルトソンも亦、繁雜なる讀書は精神を弱くすると喫煙に異ならずといひ、司馬溫公は又

學者書を讀むもの能く首より尾に至るもの少く、往々中よりし或は末より

し隨意讀み去り、又多く篇を終へず、予性專、猶ほ常に此を患へ、案上一書を讀み頭より末に至り正錯校字して終へずんば誓て他卷を讀まず。

といひて讀む所必ず終あらしめんとす、散漫なること勿れ、讀む所は終あらしめよ、此の訓誡を忘れて書籍に耽溺せば自修研學の道や終に開く能はじ。

書籍は學問の中樞、智識の淵源なれど、これのみを以て一切を知悉し了せりとして、却て世事人情に迂なるは多くの讀書家の弊で、これ亦書籍耽溺の

結果である。既にしば〳〵いふ如く讀書はこれ第二義の事、これを活用し來るに當て初めて功があるので、唯だ書に耽りて何等活用の心なきは其の讀む所を殺し、學ぶ所を葬るものである、勿論讀書は實用のみに資せらるゝのではなく、快樂の用にも供せらるゝのであるが、既に自修といひ研學といふ以上はこれを活用する所に功はあるのである。ベーコンは「餘りに多くの時間を學問(讀書を含む)に費すは懶惰なり、學問を餘りに多く裝飾に用うるは虛飾なり、全く學問の規矩によりてのみ判斷を爲さんとするは、學者の偏僻のみ」と叱咤し、讀書以上更に有用のことあるを告げて、「學問は自ら其の使用法を教ふるものにあらずして之れを教ふるは一種の智慧なりとす、此の智慧こそ學問の外にありて學問の上に位し經驗によりて得られたるものなれ」といひ讀書の箴を下して

辯論し攻擊せんが爲めに讀むことなかれ、信受し盲從せんが爲めに讀むことなかれ、談論の材料を見出さんが爲めに讀むことなかれ、唯だ重んずべく考ふべきが爲めに讀めよ。

學者の偏僻

讀書以上の事

と、これ讀書家の通弊を誡めたる訓言である、讀書家の人格を損する所は書に囚はれて活用の能を缺き、世事に迂にして自ら誇るの弊にある、これ一般學者の陷り易き所にして殊に師資なき自修の士に於ては一知半解獨り高うして世と相容れられざるに至るのである。足代弘訓は近世の國學者なり曾て自ら警めて

足代弘訓の自警

一。人をあざむくために學問すべからざる事、
一。人とあらそふために學問すべからざる事、
一。人をそしるために學問すべからざる事、
一。人の邪魔するために學問すべからざる事、
一。名を賣るために學問すべからざる事、
一。利を貪るために學問すべからざる事、

といひ、三浦梅園は學徒に示して、

三浦梅園

一。學問は飯と心得べし、腹にあくが爲めなり、かけ物なぞのやうに人に見せんずる爲にはあらず、

一。學問はくさき菜のやうなり、とく〳〵臭みを去らざれば用ひ難し、少し書を讀めば少し學者臭し、餘計書を讀めば餘計學者臭し、こまりものなり、

一。學問は芥のやうに思ふべからず、上に浮きたがる程に下地の水も今は呑れず、

一。學問は置所によりて善惡わかる、腹の下よし、鼻のさき惡し、

一。學問は輕業のやうにするが惡しゝ、輕業は人を目の下に見おろし、人の天窓を踏むものなり、

一。衣裳うつくしくかざり、人に好れんとするは賣女なり、人の見る時所體をなし人に譽められんとするは歌舞伎のものなり、今の學者はどうやら此眞似するやうなり、

と、いふ、皆な共に學者讀書家の通弊を矯めたるの言、世の讀書家此の言を服膺して、內深く藏して以て自己の內容を豐富にし、其の學び得たる所はこれを實地に應用して世道人心に資するの道を講せば、庶幾くは迂儒と呼ばれ死學と罵られ書蠹と嘲られ書庫と誹らるゝことなきを得んか。並河天民いふ「世事多しといへども、盡くこれ人道、人道勤めずして更に何をかせん、學問の道讀書の上にあらずして實行の上にあり」と、活學の工夫は讀書家の常に忘るべからざることである。

活學の工夫

讀書切戒在二荒忙一、　滔泳工夫與味長、
未レ曉莫レ妨植放過、　切レ身須レ要念思量、
自家主宰常精健、　逐外精神徒損傷、
寄レ語同遊二三子、　莫レ將二言語一壞二天常一、
（陸象山）

第三篇　自修の實驗

第一章　自修と學修

一　自修の効過

學問の活用

學問の要は其の間接たると直接たるとを問はず、之れを現實社會に活用せらるゝに於て初めて其の効を現はすので、如何に現實と隔離した觀ある高遠な學科でも究竟の結果は實社會を裨益し指導するにあるのだ。されば古聖も大學の道は明德を明にするにあり、民を新にするにあり、至善に止るにありとの三綱領を以て大人の學とした、明德を明にするは自ら修むる所以で、民を新にするは他に及ぼして、修めたる所を活用するに外ならぬ。佛敎では其の修行の目的を自覺、覺他、覺行圓滿とし此の三標的に向つて進ましめる、自覺は即ち明德を明にし覺他は即ち民を新にす、覺行圓滿なる所、これ至善に止るにある。一切の學藝も亦此の自他二面の圓滿を期せざるはない、已に自他二面の圓滿を期するのであるから徒に自己を粉飾して獨り知ることの多きを誇つて世と沒交渉なる小人の學は眞の學問ではない。さて此の學問の眞目的を達するには唯だ書を讀むのみを以て足れりとせず、須く實社會に接觸して世態人情を觀察して其の眞意義を解せねばならぬ。此の實社會に接觸して得來つたものが即ち常識で、眞の學問は此の常識の上に築かれて初めて力あるので、常識なき學識は其の活用に於て缺陷があるを免れない、勿論此の常識修養も讀書の力を藉るのである、又單に世態に精通するといふとも學識の補助のないものは之れ亦眞の常識を成さぬのであるが、專門の智識のみあつて少しも此常識的素地のないものは、明德を明にする自覺の方面に於てはよし不可なしとするも、民を新にする覺他の方面に於ては差支へる所あるは爭ふべからざる事實である。さて此の常識の修養は學校敎育のみで得らるべきものであらうか。學校は一定の學科を吾等に授けて呉れるが、其の一定の學科のみで實社會に處し得るであらうか、試みに自分が世に處する上に於て若くは實務を執掌する上に於て、學校に於て學び得しことゝ自己が經驗によ

學問と常識

自修と常識

つて學び得たることゝ孰れが多きかを考察し見よ、何人も其の學修し得たることの比較的少きを感ずるであらう。此に於て人は學修以外に自修の必要があるので、讀書と經驗とによつて其學び得たることを補はねば到底實社會に其の學を活用することは出來ない。これは常識の上のみではない、學識涵養の上に於ても學校の教育は受くるに限りがある、小學、中學、大學と經ても一生を通じて受くるものにあらずして多きも人生の半、少きは生涯の四分の一位に過ぎざる短時期で、其の實社會に接觸する年齢には既に學校を離れて居るのである。若し全然學校に於て學び得たることのみに依頼して、卒業後何等自修の道を講せなかつたならば、よし一切を忘却せざるにせよ時代の進運は其人を落後者たらしめずんば止まないのであるから、學識の上に於ても常識の上に於ても人は生涯自ら教ふることを忘れてはならぬのである、近世の英雄ナポレオンは小學校に通ひ、砲兵士官の學校に學べり、彼れと共に學びしもの百を以て算せらるべし、されど一人の肩をナポレオンと較するものなきは何ぞ。學校で學ぶ所は同じかりしも彼れが自修の力は確に儕輩を拔くに

自修と學識

偉人と自修

至りしにあらざるか、グラドストンはイトン校に學び、又オックスフォールド大學に入れりと聞く、彼れと共に學びしもの亦其の數多かるべし。しかも彼れの如く成功せるものを聽かざるは何ぞや。彼れ自ら語りていふ、「予が後年學ぶことを得たる多くのことはオックスフォールドに於ては學ぶことを得ざりし」と、彼れの成功も亦彼れが自修の力に外ならぬ。學校は同一模型により人を教ふるが故に、單に學校のみに依頼せんか、我が知る所のものは我が同列の學生の知る所のものと異ることなければ、我が爲し得ることは又彼等の爲し得ることと異らずして毫も出色の技倆を現すことは出來ない、もとより稟賦の異るあれば、同中自ら異あるべきも、學校教育が大體に於て同一模型の人を作らんとするは免る能はざる所であるから、更に一頭地を拔かんとするものは矢張これを自修の力に待たねばならぬ。自修なる哉、自修なる哉。ジョンラボックは其著、ユースオヴライフ「人生の要務」に於て殊に自修を論じ、

教育は我が一切の才能の調子よき發達なり。そは幼稚園に始り學校に進むものなれども。之れにて終るものにはあらずして終世連續すべきものたり。

ラボックの自修論

といひ、ギボンが人には二個の教育あり、一は他より受くるものにして、それよりも必要なるは自ら敎ふることなりと云へるを引用し、「吾等が自ら敎ふるものは常に人より受くるものに比して更に有用ならざるべからず」といひ更にロックが「何人も敎師の訓練と節制とによりて智識を高遠の境に進ましめ科學を優越ならしむる能はじ」と云へるを引用し、

學校に於て優秀ならざりし人と雖も、敢て失望するを要せず、大器は晩成なり。されど自ら刻苦することなくして斯くあらんには、失望せよとは云はざれど恥ぢよとは云はんとす、充分に刻苦して尙ほ優秀ならざりしならば唯だ忍耐すべきのみ。學校に於て有名ならざりし人にして他日成功せし人少なからず、ウエリントンも、ナポレオンも鈍き子供なりしといひ、アイザック・ニユートンも、ベイン・スキフトも、クライブも、ウオタア・スコットも、シエリダンも、其他の偉人にも、かゝる話の傳はれるをや。

と說きぬ。學修は自修の素地を爲すものにして其の素地を大成する眞の效果は自修獨學に於て得べきものである。

以上は學修以外に自修の必要を說いたのであるが、世には全く學修の途に就く能はずして自修のみに依らざるを得ざる不幸の人なきにあらず、小學敎育は國民の義務として受け了るも、家に資なくして中學に入る能はず、中學の課程は漸々にして終りたるも進んで專門學校若くは大學に入る能はざるの徒は少なくない。是等の人は學修の助けなくして自修の途に就かねばならぬのであるが、これ果して爲し得らるることであらうか、吾等は之にも志だに堅ければ爲し得ざるにあらずとの斷定を與ふるに躊躇しない。小學校に於ける學修の素地によりて中學の課程を自修し、其の自修し得たる素地によりて更に高等の學科を自修し、倦むなく怠るなくんば略ぼ其の課程を修了することが出來る、殊に今日は書籍の出版盛んに稍々完全したる講義錄の如きものも亦行はるれば、之に依りて孜々として努めなば絕望すべきほどではないのである。併し是等はもとより變則で、大根氣あるものにあらざれば成功することと難く、加之、指導の人を缺くが故に他の一年に修了すべきことを二年三年の日月を要し、而かも其の見解に誤謬を生ずることがないとは云へないので

あるから、少くとも專門學を修め得べき素地たる中學程度の教育は學修した方が便利であるし、能ふべくんば一人前の人物として社會に立ち得る專門の學科も學修するに越したことはないが、今はそれの出來ない場合である。此の場合にも自ら二樣ある、一は自己が一家の生活を支へねばならぬ場合で、他は自己の力によりて學資をさへ得ればよい場合とである。前者は繫累があるから出でゝ學ぶといふことは出來ないが、後者は自己の勞力だに厭はずば自活の途を開いて傍ら勉學することが出來るのである、前者にあつては自修の不完全を自己の勉學で補ふ覺悟を以て書籍や講義錄によりて自修する外はないが、後者にあつては或は新聞を配り牛乳を運び、或は車夫となり馬丁となり其職の卑きを厭はず、閑を得て學校に入り所謂自活苦學の法を講ずるのである。是等孰れの方法によりても意志だに强固なれば決して爲し能はざることはないが、志を立つるの初に於てこそ猛然として百難を排し千苦を凌ぐの慨あるが、出でゝ學ぶものは同學生の安逸なるを見習ひ、若くは都會淫靡の風習に魅せられ中途に蹉跌して終に墮落の深淵に下るもの少からず。內にあつて自ら修むるものも漸次に書籍を離れ、若くは讀むべからざる書に耽り、或は現在に安んじて向上の志を失ひ、中絕するに至るものゝ多いのは吾等の日常に見得る事實である。

二種の事情

自修者の失敗

自修の中絕といふことは是等の人々のみではない。專門の學校をも卒業した人々に於ても其の例を見るのである。彼等は已に素地があるのであるから自修は最も便利であるのに甚しきは學校の卒業を以て學問の卒業と心得、毫も自修の志ないものもあるが、よし初めに自修の志ある殊勝の人も塵務の蝟集は之れを妨げて中絕に至るを免れない、一日自修を怠れば一日時代に遲れ一日活學に疎なるものである。學修は易く、自修は難い、如何にして此の自修を全うすべきか、次ぎに少しく其の心得を語つて見やう。

二　自修の規則

興味

何事も之れに對する興味のないものゝ永續する理はないのであるから、自修者は第一に其の自修の學科に對して興味を持たねばならぬ。世に所謂好學

の士なるものは其の學藝に對して多大の興味を感じ、其の爲めには一切の快樂を犧牲に供し一切の嗜好を放擲し去るも尙ほ且つ此の興味を持續せんとするの熱心あるもので、此の熱心がやがて彼等をして成功せしむる所以である。彼の苦學生が其の勞苦を辭せずして能く學業を成功せる所以も此の興味である、學藝其者に興味を有せざるものは僅かの成功に滿足して終に半途に業を廢するの憂がある、終生自修を怠らざるのは確かに此の興味が主要の原因である。近世哲學の大家たるスピノーザは糊口に窮して、アムステルダムなる知己の家に寓し僅に習ひ覺えし眼鏡（レンズ）磨きを爲しつゝ尙ほ其の研究に心を凝らし永恒の眞理に接することを唯一の興味とし終に哲學史上の一偉人たるに至りし如きは好個の實例である。我が國にて近代の篤學者と云はれし中村敬宇、曾て重野安繹に語て「予に多情の病あり」と、安繹怪みて「君の性行嚴肅方正、何が故にか多情といふ」と、敬宇答へていふ「事の苟も學問に關する時は之を修せんとするの念勃然として起り又之を制する能はず、これ多情なる故にあらずや」と、安繹いふ「學問に多情なるは賀すべし、何の咎むべきかあら

中村敬宇の逸話

ん」と、敬宇いふ「多情なれば專ならず、專ならざれば造詣淺し、これ予の大に憂ふる所以也」と、敬宇先生の如きは學藝に多大の興味を感じ却て其廣きを悲まれたるもの、而も此の興味は先生をして家計を節して書を購はしめ藏書數萬卷、學も亦東西に通ずるに至らしめたる所以である。興味は自修の主因である、これあるが爲めに其の修むる所に向て間斷なき修養を生ず。書家圓山應擧が家の內外にあるを問はず、寫生に怠なかりしは人の傳ふる所にして書畫の名手と謳はれし田能村直入が步行するに當りて必らず扇を取り肱を張り空に經劃して運筆の法を練りしも亦人口に膾炙す、昔、加賀の士に茶湯を嗜むものあり、江戸參勤の途中も茶器を携へ旅舍に釜を掛けて之れを樂む、同行者之れを詰りて如何に好めばとて道中のみは見合すべしと云ふ、其の人答へて『道中の日とて一生の外にはあらず。これも一生の日數の內なれば我が茶の湯をする日にあらずといふことなし』と、これ風流遊戲の一末技なれど間斷なき修養の必要なるは何事に於ても異ることなし。彼の羅馬の博物學者プリニーが食事の際も尙ほ勉學を廢するを厭ひ、從者に命じて書を讀

間斷なき修養

ましめ耳を傾けて學ぶ所ありしといひ、古昔の英雄が陣中に經書を講じて怠るなかりしといふ如きも亦間斷なき修養を要する實例である、點滴も亦石を穿つ、日々怠らざる修養は生來如何に遲鈍の人たりとも之れを大成せしめざるの理はない、

頼山陽の刻苦

頼山陽常に門人に語りていふ「我を才子といふは未だ我を恐くせるものにあらず、我を能く刻苦すといふは眞に我を知るものなり」と。才人頼山陽の如きも尙ほ且つ刻苦の功を以て名を成す、間斷なき修養は自修者の忘るべからざる條件である。

此の間斷なき修養を怠らざるには必らず意志の强固なるを要す。薄志弱行が何事をも爲す能はざるは云ふまでもなけれど、殊に自修者は自ら自己を監督し自ら自己を鞭韃せざるを得ざるものなれば、堅忍不拔の意志を有せざれば修學の當初に於ては倦怠の心を生ぜざるも少しく事の困難なるに會し、若くは他の誘惑に遇ひては志氣沮喪し終に自ら之を廢するに至るを免れないのである、能く此難關を透過して終に成功の域に達せるものも亦少くない、彼の新井白石の如きは確かに其の一人である。新井白石の父は上總土屋侯の臣にして白石生れて穎悟、九歲にして早くも自修の念を發し秋冬の間、課を立てゝ一日中、行草の字、晝は三千、夜は一千を限りて習得せんとし睡を催すの時は自ら冷水を浴びて其の課を遂げ、研鑽怠るなく、十七歲初めて中江藤樹の翁問答を讀みて聖學に志し我が家に出入せる醫師江馬益庵に就きて小學題辭、程子四箴の講義を聽き、尋で自ら四書五經を繙き讀むに至りしも句讀の師なかりしより獨り韻會字彙等の辭書を唯一の師として之を修め刻苦倦まざりしが、白石二十一歲の春、父は藩主の憤に觸れて俸祿を褫はれ、白石も亦共に流浪の身となり生計頗る苦境に陷り宿昔の志一大蹉跌の機に遭遇せしも彼れは尙ほ其の勉學を廢せず、偶ま一代の富豪河村瑞軒彼れが才を愛し之れを亡兄の娘に配せんとして彼れにして之に應せば三千金に値する宅地を擧げて其の學文の資に供せんといふも應せず、窮達は命なりとて晏如として書を讀み、出でゝ堀田侯に仕へしも亦致仕して僅に靑銅三百と白米三升を藏して尙ほ讀書を廢せず、後、幕儒木下順庵の推擧によりて甲府公に仕へ、其の蘊蓄を悉くして頗る信任を得、公の入つて六代將軍(家宣)となるや亦召されて

侍講となり次で筑後守に任ず、彼れは實に其の强固なる意志に於て自修を成功せるもの。ジョンハンター曾ていふ。『爲し難きの事に遇ふて志氣を沮喪するものは終に大業を成す能はず、爲し難きの事に於て初めて其の成功を見る』と、自修は爲し難し、此の爲し難きに打克つの意志あつて初めて其の目的を達す　されば自修者は

意志の强固

自修規則

一　其の自修の科目に興味を持つこと、

二　其の學科に對し間斷なき修養を怠らざること、

三　意志の强固なること、

の三條件を要す、此の三條件を基礎として尙ほ更に其の細則を示さんか、

勞苦を辭せず

イ　勞苦を辭せざること、

習ふは易く修むるは難し、易きに就きて難きを棄つれば長進することあるなし、ボックストンいふ、『他人より一倍の光陰を用ひ一倍の勞苦を辭せざれば必らず他人の成せる事業を成し得べし』と、初めより容易なることは心に入り難し、勞苦を經來れる容易に於て眞に熟達の域を見るのである。

方向の一定

課程

ロ　方向を定むべきこと、

無方向の勉學は勞多くして功少い、スマイルスの『自助論』は此事を敎示して

書籍は人の智識を益すものなれど徒に多く讀むのみにては智識を益すこと能はず、されば第一に豫め目的あるべきを要す、何なりとも此の事を研究せんと思ひ目的を定めて而して後に書を讀むときは我が心と書中の意義と相投合するものなり。

と、興味に任せて方向を定めざれば中村敬宇氏の託ちし如く多情の病に落ちて造詣深きを得ず、且つ又方向幾度か變じて修むる所散漫なるを免れじ、古人も一事に一課程を善く爲すものは許多の課程を爲すものなりと云ひしが如く、既に學ぶべき方向を定めなば其の方針にのみ專心するは自修者の忘るべからざる法則である。

ハ　課程を定むべきこと、

スマイルスの自助論は更に語を繼で。

第二には我が力に應じたる定規を立つるを要す、かくせば學ぶべき事に秩序ありて散漫なるを免るべし、アベルネインいふ、我が心に他物を容受するには自ら定りたる分量あり、若し其の定りたる分量以外に物を容れんとする時は必ず外の物を押し出さゞるを得ず。

と云へり、されば自修者は先輩知友に就き若くは自己の學ばんとする學科を教授する學校の課程等を參照して豫め其の課程を定め歩々之れに順つて向上の途を辿らば大なる誤なく目的を達することが出來るであらう。

時間の厳守

二　時間を守るべきこと

既に課程を定めたる上は夫れに對する時間を定め一日の中幾時間を自修に供すると定めなば如何なる支障の生ずるとも、其の時間は萬事を放擲して之れに向ひ、若し又如何とも爲し難き時は夙に起きて之れを恢復し、若くは遲く寢ねて之れを補ひ、一日も廢するなきを努むるは自修者の當然守るべきことである。終日勞役に服する人も一日僅に一時間若くは二時間を此の自修に供せば數年の後には、空しく此の時間を費せるものに比して優ること數等なるの見地を得るのである。

以上は實に平凡なることであるが、さて此の平凡なることの實行し難くて常に失敗に了ることは吾等が日常目睹する事實である。古人の成功は多く之れの實行に出づ、次ぎに二三の事例を示さん。

世にしげき言の葉艸を吹きわけて
家の風をも傳へてしがな

ふみわけよやまとにあらぬ唐鳥の
跡を見るのみなみの道かは

荷田春滿

第二章　自修と苦學

一　古人の苦學

書籍を得るに苦みし古人の事蹟は、現代に縁遠けれど、資に乏しくして書を購ふに由なく生計に追はれて學に就くの暇なき古人の苦心は、今尚多大の訓誡を吾等に與へ、彼等が嘗めし苦き經驗は吾等の志氣を奬まして自修の念を切ならしむる感がある。吾等は上來隨所に這般の事例を引用したが、尚ほ其の漏れたるを云はんか。山崎美成の世事百談には苦學の蹟を擧げて（世事百談中には上來引用せるものと重複するもの多けれど全文を掲ぐ）

古人苦學の者少からず、其の圍き枕に睡をさまし、戸を閉ぢて人に遇はざるの類ひ、或は勤仕のしげく活計のいそがはしきに至りては夜を以て日に繼ぐ、我が邦のいにしへ大學寮の書生に學文料をたまふ、これを燈油料といへり延喜式に見えたり、またともし火ののぞみともいふこと續世繼物語にあり、なべて書のほどより夜は物しづかに心おちゐて書よむには殊にたよりよければ閑人の兼好法師などすら、ひとり燈の下に見ぬ世の人を友としてなどいへり。蛍無咎が書燈銘に

武子聚螢孫生映雪。雪固易消螢亦易滅。惟此銀缸不炱其光。黃籠絲幕永夕煌々。

經史在右子集在左。如或不勤負此燈火。

楊升菴外集に見えたり。しかれどもことに貧困にせまりては、あるひは夜學に燈火のそなへなきに及びては、螢をあつめ雪に映ずるに至れり。今そのたぐひ數條をこゝにしるす。後進のものかならず貧窶をもて、學を廢することなかれ。

壁を穿て書を讀む

西京雜記云。匡衡字積重、勤學而無燭。隣舍尋燭而不逮。衡乃穿壁引其光。以書映光而讀之。

雪に映じて書を讀む

孫氏世錄云。康家貧無油。常映雪讀書。（參求註引）

螢をあつめて書を照す

晉書云。車胤恭勤不倦。博學多通。家貧不常得油。變月則練囊盛數十螢火以照書。以夜繼日焉。

糠を燈して書をよむ

南齊書云。顧歡八歳誦孝經詩論。及長篤志好學。母年老躬耕誦書。夜則燈糠自照。

月の光に隨ひて書を讀む

南齊書云。江泌少貧。晝日所履夜讀書隨月光。宋史云。陸細字農師。越州山陰人。居貧苦學。夜無燈映月光讀書。蹈歴從師不遠千里。過金陵受經於王安石。

薪を燃して書を讀む

唐書云。畢誠孟孤。夜燃薪讀書。母卹其疲奪。火使寢。不肯息。遂通經史工辭章。

木葉を燃して書を讀む

唐書云。柳璨字炤之。公綽族孫也。爲人鄙野。其家不以諸柳齒。少孤貧好學。晝採薪給費。夜燃葉照書。彊記多所通涉。

明世說新語云。鄒皆居龍泉菴。貧無繼晷之給。掃樹葉。蓄之焚以照讀書。達旦如是者三年。遂成大儒。

ジョンソン

竈火を吹きて書を照す

天寶遺事云。蘇逈少不得父意。常與僕夫雜處。而好學不倦。每欲讀書。又患無燈燭。常於馬厩竈中旋吹火光照書誦焉。其苦學如此後至相位。

と示しぬ、こは皆な燈火をだに得るを苦みし事例にして、其の學資を得るに刻苦したる事例は歐米に於て殊に多きを見る。英國著名の大文豪たるジョンソンは露店に書を鬻ぐ貧家の子と生れしかど研鑽怠るなく、然かも學に就くの資なきを以て十九歳にしてペンブロック大學の校僕となり、雜役に從事する勞ら苦學の勞を重ねしが、當時彼れの衣は敝れ彼れの靴も亦裂けて指頭を露し諸生に嘲弄せられしも屈せず、富豪の子の彼れを憫みて新調の靴を贈りしも受けず。毅然『予は他人より憐愍を受けて身を飾るを欲せず』とて敝靴に安じたれど、父の病死は一家を支ふべき任務の彼れの双肩に懸りて終に學校を去りて自修の人となり僅に麵麭と水とを以て飢を凌ぎ、此の刻苦の裡に後年大文豪として立つの素を養ひしといひ、同じく文豪として嘖々の名あるゴールドスミスは愛蘭土の片田舎なる敬師の子と生れ、家貧しくして兄弟多

ゴールドスミス

く到底完全なる教育を受くる能はず、トリニチー大學の校僕となりて勞役に服し旁ら少しの補給を得て、學修を努めしも、父の死は其の補給だに絶えて、終に大道に歌曲を讀賣して學資を補ひたりといひ、ワシントンを助けて米國獨立の大業を成せし、フランクリンは十七人の兄弟の第十五人目と生れ一家の事情は長く彼れを就學せしむるを許さず、十二歳にして早くも活版所の小僧となりしも一刻も讀書を廢したることなく、晝間勞働の劇しきにも拘らず時に夜を徹して書を讀み、書を購ふが爲めには肉食を棄てゝ食費を減じ食物を以て胃腑を充さんよりは書籍を以て頭腦を豐かにするに如かずとて他の職工の食事に出る時も、工場にありて麵麭と水とを以て之れを辨じ其の時間を利用して書を讀みしといふ如きは其の一斑に過ぎない。

フランクリン

我が國に於て勞役の傍ら苦學せるものを擧ぐれば第一に指を二宮尊德に屈せざるを得ない、彼れも亦貧家の兒と生れ、加ふるに年甫めて十四にして父を喪ひ二弟は母と共にあり、長子たる彼れは伯父萬兵衞に依りしが、萬兵衞酷薄にして彼れを遇する奴僕の如く辛酸備さに嘗めしも夙に好學の志ありて

二宮尊德

大學の書一冊を得て山に入り、薪を刈るの時も、市に下りて之れを賣るの時も讀誦して止まざりしが、萬兵衞の家に寄食してよりは晝は農耕を勵みて書を手にするの暇なく、夜は奴僕と同じく繩を綯はしむれば讀書の時なけれど好學の彼れは夜間勞働了りて、獨り燈下に書を繙きしに鄙客なる萬兵衞は之れを以て燈油を浪費するものとして止めしかば、自ら路傍の空地に芥子菜を蒔きて菜種を得之れを燈油に換へて書を讀みしに、かくても萬兵衞は夜間の讀書は晝間の勞働を怠らしむるものなりとして之れを禁ぜしに、彼れは其の罪を謝して爾來は夜闌け人眠るを待ちて行燈に襦袢を掩ひて燈光の外に洩るゝを防ぎ書を讀みて曉に至るを例とした、此の一事以て彼れの苦學を想像するに餘りあるのである。

古今東西成功者の傳記は多く苦學の歷史にして其の成功は皆な彼等が自修の中より得來りたる効果に外ならない、吾等は彼等に於て自修に對する深厚の興味を見、又之れに對する意志の强固を見、かねて其の間斷なき修養を學ぶのである。

二　苦學の成功

吾等は上來しば〳〵斷片的に自修者の苦心と古人苦學の蹟を示し、其の强固なる意志と不斷の修養とが終に成功の域に到れることを告げしが、今此の章を結ぶに當り殊に東西二人の實驗を擧げて其の成功を示さん。西なるものは人道の爲めに奮鬪せし米國屈指の大統領アブラハム・リンコーンにして東なるものは我が膠海舟である。共にこれ立志傳中の人、兒童走卒も其の名を記する自修の成功者苦學の模範者である。

リンコーン

アブラハム・リンコーンの父はトマス・リンコーンといひ、今を距る約百年の昔、其の子アブラハム八歳の時故郷ケンタッキー州を去りてエンジャナ州ディントリビル村に移住せる貧民にして、窓なく戸なき破屋に棲みて、斧を振つて木を伐り銃を放ちて獸を獵りて僅に口を糊せるに過ぎざりき。父は家業に暇なければアブラハムは母と共に家にありて慈愛深き敎訓を受けつゝ僅に字を學びしが、不幸にして早く其の母を喪ひ、後は繼母の手に養はれて、書を

アシントン傳を讀む

讀むことを得るに至りしも、二三の書を讀み了りては家に藏書のあるべきにあらねば。近隣の富家に請ひて其の書を借覽し字を辿りて之れを讀み孜々として怠ることなく、稍長じて父の業を助けつゝも尙ほ讀書を以て晝間の疲勞を癒す唯一の快樂とし借りては讀み、讀みては借り、屢〻其の富家に往來せしに富家にても其の志に感じ、一日ワシントンの傳記一冊を出して此書こそ汝の讀むべきものなれと出されたるに、アブラハムは大に喜び家業の傍ら熟讀玩味して其人格の偉大なるに打たれ、私かに天下を以て理想とし、孤村破屋の一少年は人の其の目的を問ふに對しては常に未來の大統領を以て答へた。此の如く彼れを啓發したるワシントン傳は此貧家の棚の上にありて一夜雨漏りの爲めに甚しく汚損せしに彼れは大に驚き往きて其の貸主に謝し「予の不注意は終に恩借の書をして此の如く爲したり、予は本書を購ふて辨償せんとすれど、予が家もとより貧しければ直に之れを償ひ難し、請ふ一日一シルリングの賃銀を以て貴家に雇はれ命のまゝに勞働し三日を以て之れを償はん」と、かくして汚れたりと雖も彼れの耽讀したりしワシントン傳は彼れの所有

木片を焚て燈火に代用す

に歸し日夜手を離さゞる座右の友となつた。其後も彼れは他の農家の雇人となり年十八には一商家の店員となつて家計を助け翌年は故郷を出でゝミスシッピー河船の傭夫となり爾來幾多の困難を經、賃銀を貯へては書を購ふの資とし、偶ま所刊の書の市街に到着するあれば數里を遠しとせず、走りて之れを求め、燈火の費をも節し蠟燭に代るに木片を以てし之れを焚きて以て書を讀み其の得る所は一々備忘錄に手抄して記憶に供し、其他日常見聞する所の諸種の事件をも併せ手記して常識の涵養に充て、徐に他日の大成を期して居つた、蘊蓄彼れの如し、機會は終に彼れの頭上に來り、偶まブラックホーク地方に爭亂起り彼は選まれて民兵の一團長となり、亂戡んでは州會議員の候補者に擧げられ、第一回は失敗に終りしも第二回に於て當選し、かねて彼れの志せる法律研究も自修の力漸く功を積みて辯護士の免許を得、此に成功の緒を發き千八百五十六年には副大統領に選まれ、次で同六十年には大統領となり、正義の爲めには萬難を排し、人道の爲めには艱苦を辭せず、其の宿志たる奴隷解放を實行して南北戰爭を開始し、幸にして解放論の勝利に歸せしも

正義の爲めに戰ふ

奴隷制度の維持を主張したる南部諸州は憤怨未だ止まず、一千八百六十五年四月十四日リンコーンは南部諸州の味方たる凶漢ブースの爲めに狙擊せられ五十六歳を一期として不歸の客となつたが、其の偉蹟は今尚ほ傳へられて、正義の模範とせらる。彼れの生涯は實に奮鬪の歷史、自修の傳記であつた。

窓なく戸なき破屋の一子、一躍して大統領となり、赫々の威名を今日に遺す、誰か自修に成功なしと云ふや、吾等は彼れの傳記に於て、明かなる證明を得るのである。

我が勝海舟は亦實に自修苦學の成功者である。彼れは旗本八萬騎中の一人と生れしかど小祿の上に彼れの父は粗放にして產を治めざりければ死後多くの負債を遺し、十七歳の彼れは其の後を受けて家督を相續した、しかも武士の面目斷じて負債を償ふべきを誓ひ衣食を節して之れに充てたほどであるが、好學の志は少しも止まず、書を讀まんことを欲すれども之れを得るの途なく、僅に書肆の店頭に立ちて讀むで渴を醫したのである。後年自ら語つて、

老爺壯年の頃は極の貧乏で書籍を購ふの錢はなくて實に困難を極めた、

店頭に書を讀む

時に日本橋と江戸橋との間に小き本屋があつて其の主人の嘉七といふのは感心な男で始終店先に立つて種々の本を立ち讀みして居ると、後には貧乏で本の購へないことを知つたと見えて、親切にして呉れた、然るに其の店に北海道の商人で澁田利右衛門といふ男が始終やつて來て、嘉七より老爺の噂を聞き、それは感心な方だ、自分も本が好きだから一つ遇つて見たいと嘉七の店で遇つた。……二三日すると澁田は老爺の家に遣つて來た。時に老爺は非常の貧乏で疊といへば僅か二三枚ばかり天井といへば盡く焚してしまつて板一枚もない、彼れは此の家に遣つて來て別に氣にも掛けない風でゆつくり話をして……歸りがけに懷中より二百兩の金を出しこれは僅かばかりだが、貴下が本を購ひなさる料にでもと言つて差出した。老爺は此の時分極く貧乏で一所に纏つた二百兩といふ大金を見たことがない故少々呆氣にとられて居ると、彼はイヤ左樣に御辭退なさるに及ばぬ、こればかりの金、貴下に呈げなくても何かに遣つてしまう。これで貴下が珍らしい本を購ひ、御讀みなさつて跡を私に送つて下さるれば何より結構だと

辭書を手寫す

強ひて與へて歸つた云々（德富蘇峰氏海舟一夕話）

彼れは此に好個の保護者を得たり、されど其の苦學談は之れに止らず、其の蘭語を學ぶの時に當り辭書の印行せられたるものは僅に一種にして六十兩を値したれば到底赤貧者の購ひ得べきことにあらず。されど辭書なくては廣く蘭書を讀む能はず、如何かして之れを得んとて遂に蘭醫赤城某の秘藏せるものを一ヶ年十兩の約にて借り受け、寢食の時間をさへ惜みて之れを謄寫し、更に一部を謄寫して之れを他人に賣りて謝料並に筆紙の諸費用に充て、終に大冊の辭書を藏するを得た、其の苦心は吾等が想像し及ばぬ所である。其の卷末の記にいふ。

弘化四丁未秋、業に就き翌仲秋二日終業、予此時貧、骨に到り、夏夜無蚊、冬夜無衾、唯日夜机に倚て眠る。加之大母病氣に在り、諸妹幼弱不解事、自ら椽を破り柱を割て炊く、困難到于爰、又感激を生じ一歲中二部の謄寫成る、其の一部は他に鬻ぎ其の諸費を辨ず、嗚呼此の後の學業、其の成否の如き不可知不可期也。

深夜兵書を寫す

と、彼れが苦學に就ては更に語るべきものあり、其の西洋式の兵術を學びし時坊間の一書肆に新刊の兵書あるを見、得難きの好書なるを知りたれば之れを購はんとし、價を問へば五十兩といふ。五十兩の大金は遽かに辨ずべきにあらず、百方苦心し十數日を經て漸く之れを辨じて書肆に赴けば、其の書は早くも他人の購ふ所となる、遺憾に堪へず、其の人を問へば四谷に住する與力某なり、輙ち歩を轉じて其の門を叩き、切に情を陳じて讓與を請へど、某とても讀まんとて買ひたるもの讓るべき筈なく、更に借覽を請へど、これとても數日前僅に購ひたるもの讀み了りたる後ならでは貸し難しといふ。此に於て彼れは意を決して晝間は足下に於ても必要ならん、されど夜間寢に就くの後は不用なるべし、請ふ三更の後之れを讀ましめよと、某も其の執拗に驚き戸外に持ち去るなくんば可なりといふ、彼れは此に於て毎夜本所の住宅より殆んど二里に近き某の家に至り、雨夜雪晨も往復を廢せず。かくすること半歳、終に八卷の兵書を手寫し了る。苦學此の如し其の造詣深く見識亦群を抜く、安政二年幕府海軍傳習所を長崎に開くや選ばれて其の傳習生となり、

幕末の偉人

航海、造船砲術、測量等の諸學科を蘭人に受け、學藝の餘暇市中を散歩する時にも其の見聞する所を手記して常識修養の用に供し日夜怠らず。後江戸に歸りて、海軍操練所教授方頭取となり、萬延元年には咸臨丸の艦長として米國に渡りて海外の事物を觀察し、歸て天守番頭、蕃書取調介となり、更に海陸御備向取調の御用を受け累進して安房守に叙せられ軍艦奉行となり次で海軍奉行に任ぜられ若年寄格となり、陸軍總裁の要職に擧げられ幕末掉尾の大政治家として手腕を振ひ、頻りに朝幕の間を奔走して、自ら死生の巷に出入し、終に江戸城明渡を遂行したるの事蹟は人の知る所、而して彼れの偉蹟は實に其の苦學の中に得來りし蘊蓄より出でたのである。王政維新の後、外務大丞に任ぜられ、兵部大丞に轉じ、次で參議兼海軍卿となり大業漸く緒に就くの後、職を罷めて閑地に居り明治三十二年を以て薨ず、青年の歴史は海舟一個の苦學史なれど此の苦學中に得來りし中年以後の活動は海舟一個の歴史にあらずして日本史中の一節である。彼れ曾て人に語つていふ。

人間はしば〳〵逆境に陥りて鍛錬しなければ、確然（とつかり）した人間には成れない

逆境の修養

ものだ、結局斯ういふ逆境の間に練り上げた膽力、智力、勇氣が一代の事業を成功する所の血液だ、能く人は膽力が何うだの魂氣が何うだのと云ふがこれは矢張面々其の人の天分に由るものだが、平生心掛けて修養さへすれば何うともなるものだから、これだけしか延びないと自分で諦めるものは唯だそれだけで固まつてしまう、更に己れは澤山に延びなければ成らぬと思つて修養すれば人間の朽ち果つるまで延びるのが天分といふものだ。

徂徠でも白石でも彼等が若い時分には皆な田舍で大根の尾や甘藷の蔓を嚙つて生長したぢやないか。其の逆境時代に苦心して思はず知らず練上げた精力が結局彼等の一代に事業を成功せしめた血液となつたのだ。

と、吾等は彼れによりて此の語の活現を見る、順境頼むに足らず、逆境悲むに足らぬ。唯だ意志の強固と不斷の修養とは何人をも成功せしむる素因である。

三　爲學の精神

直接興味

目的と手段

古人成功の跡を見て今人の狀に及ぶの時、其の強固の意志と不斷の修養とに於て遠く及ばざるものあるは云ふ迄もなけれど、尚ほ其の爲學の大本に於て大なる差あるを認めざるを得ない。古人の學に志すは自己を向上し、自己を充實し、自己を修養する上に於て直接興味を有するので、彼等は爲學其れ自身に快樂を有し、讀書其れ自身に愉快を感ずるが爲めに之に伴ふ勞と苦とは彼等の敢て辭する所でなかつたのである、一日の勞働漸く終り、歸りて破屋孤燈の下、書を讀む所に無限の興趣存し、刻苦精勵、能く一卷の書を得て、之れに多大の慰藉あるを得たのである。今人の多くは果して此の直接興味を有するであらうか、彼等の多くは爲學其れ自身に興味を有するにあらずして之れを以て糊口の資を得んとするにある、自ら學ぶ所を活用して糊口の資を得んとす、卑むべきに似たりと雖も、其學ぶ所を當世に應用する手段としては毫も差支を見ないが、彼等の多くは此の自信だもなく、唯だ其學び得たりといふ學業の證明を以て糊口の途を得んとするのにある、彼等にあつては糊口は目的にして學を爲すは其の手段たり、書を讀むは其の方法たるに過ぎな

い、されば彼等の刻苦する所以は其の證明を得るに必要なる試驗あるが爲めである。今の學生に對して此の試驗制度を廢したらば彼等は果して刻苦するであらうか、試驗は實に彼等を奬勵するの唯一無二の方法である、彼等は此の試驗なる間接興味に動かされて刻苦もし、精勵もするのである、徹宵書を

間接興味

讀み、終日學を爲すの苦學は唯だ此の試驗あるが爲めである。これ古人と其の跡を異にする所でなからうか、古より科擧の制あり試驗の事も亦行はれざるにあらざりしも、古人の學を爲すは決して其の爲めではない、これをリンコーンに見、これを勝海舟に見、これを新井白石に見、これをスピノーザに見、これを二宮尊德に見るも彼等の刻苦し精勵した所以は試驗ある爲めでもなく、卒業の證明を得る爲めでもない。若し苦學の義を學ぶに苦むと解せずして學ぶを苦むと解せば今人は却て古人に過ぎたるものがあるであらう、古人は學を爲すに苦んだが、學其れ自身に興趣を有したのである、彼等は苦中に樂地があつたのであるが、今人は學其れ自身に興趣なきが故に彼等は僅に間接興味たる試驗に促されて已むなく學ぶのであるから、學ぶに苦まずして學ぶを

苦學の意義

苦み、古人は學ぶに苦んだが、又學ぶを樂んだ、これ古今成否の別るゝ所にして學者の最も注意すべき要點である。更らに其の大本に向て云はしめよ。

吾等の世に存するは生きるといふが目的でない、人の人たる道を行はんが爲めに生くるのである、此の人の人たる道を行はんが爲めに自己を向上し、充實し、自己を修養するので爲學の大精神此にあり、讀書の根本要義は此に存するのである、此の大精神を忘れ、此の根本要義を逸して生きんが爲めに學び、口を糊せんが爲めに讀む如きは其の本末を誤り經重を顚倒するものである、此の大精神に向て刻苦し、此の根本要義に向て精勵す、學を爲す一日、一日の利あり、書を讀む一日、一日の益あり、無限の滋味此の間に溢れ、人道の大本、此の間に成る。伊藤仁齋、曾て門弟子に示していふ、

爲學の精神

聖門の學は大事なり、其の志を立つること大なるを欲す、道を信ずること篤きを欲す、而して之れを守るに死を以てす、他事の爲めに勝たるゝこと勿れ、俗情の爲めに經はるゝこと勿れ、勇往向前、一日は一日より新ならんことを欲す、若し其の志、功名利達にありて聖門德業の實にあらず、詞

伊藤仁齋

章記誦を以て足れりとなして道德仁義の奥にあらざるものは此座に與ることなかれ。

と、伊藤仁齋は實に此の自らいふ所を實踐し躬行した人である岡田寒泉の幼學指要にいふ、

凡て學は己れが未だ知らざることを知り、疑はしきは審に問ひ、己れが未だ行ひ得ざる所を勤めて聖賢の域に入んことを欲すべし、然らざれば數萬卷の書を讀み、千萬世の古に通ずるとも、今日の益なかるべし。畢竟學は人たる道を實に知り實に行ふことなり。博聞强識、或は詩文に巧にして且つ書を口に說て審なりとも、踐み行ふこと能はざれば虛文虛說となりて罪を聖賢に得るに至るべし、深く警めて自ら省み、實に知りて實に行ふべし。

道を知り道を行ふ

と、學に志すは道に志すなり、道に志すは自己を勤めて聖賢の域に入らしむるなり、聖賢の域に入らしむるとは人道の大本を盡くして我が生活をして有意義ならしめ、古聖先賢の此の世に盡くせしが如く、吾も亦此の世に盡くす所あらんとするの理想を以て立つのである、何が爲めに書を讀むか道を審にせんが爲めなり、何が故に學に志すか、道を行はんが爲めなり、道は之れ宇宙の理想、人は其の理想を體現して其の進歩向上を計る所に生存の意義あるのである、古人の學に志す、心此に在り、今や科目多端、讀むべきの書亦頗る多しと雖も此の大精神を以て進まば大道多岐なく達者途を一にし、一卷の書、一科の學も亦道に入り道を行ふの根本たることを得む、縷々述べ來りし爲學の精神、讀書の要義も亦實に之れに外ならず、古人成功の跡も此の志に存するのである。

大道の體現

社會教育論

讀書法了

社會教育論

一　社會教育とは何ぞ

二種の意義

相互の教育

社會教育とは何であるか、これには二樣の意義があつて、一つの方は、社會主義的の教育と云ふので、昔は大名は大名、武士は武士、百姓は百姓と其の身分に應じて教育のやり方が異つたものであるが、さういふやうな階級的區別を一掃して四民平等に同一校舍の中で教育するのが社會主義的で、これを從前の階級的教育に對して社會教育といふので、今日の小學中學大學の制度はこれで彼の學習院の如きは此の主義に反するものである、併し今、世人の口に上つて居る社會教育といふのは此の方の意義ではなく、學校教育家庭教

社會教育とは何ぞ

育と區別して社會教育と云ふので簡單にいへば學校内でやるのが學校教育、家庭の中でやるのが家庭教育、社會全般にやるのが社會教育で、彼の西哲が世界は大學校なりといふたのは此の社會教育的見地である。

若し廣い意味でいへば、社會教育には教育者として定まつたものはなく、人は相互に教育者となり被教育者となつて社會の共同生活の發達を促すのであるから、人々個々自己の本職に奬みつゝあるも亦直に他を啓發する所以となるのであると見ることが出來るが、今は暫く其の範圍を縮少して教育者と被教育者とを對立せしめて考へると家庭教育は父母兄姉が其子弟に施すの教育でこれは單獨なものであるが、學校教育は他の子弟と共に集合的に行ふもので此の點が家庭教育と學校教育との差であるが、學校に於ては集合といふても大抵被教育者の年齢の同じきものを集めるがこれが社會教育となると年齢の差は甚しく其集合の範圍も廣くなるのであるから其の教育法といふものも非常に困難になる、それのみならず、學校教育に於ては被教育者と教育者との關係が密接で且つ範圍が狹小で且つ定住的であるから比較的に其感化を深からしむることが出來るも、社會教育となると其範圍が廣く且つ浮動的であるから教育者と被教育者との關係が疎遠で感化を充分ならしむることが出來ない。

家庭、學校幷に社會教育

社會教育の困難

今一つ至難の點を數へると家庭教育は學齢に達するまでが主要で、學齢に達すると直に學校教育の領分になる——勿論學校に入つたからとて家庭教育が止るのではないが——それから小學中學大學と皆な學校教育で、學校を出たものは皆な社會教育の配下に來る、これには小學を出たものもあれば中學を出たものもあれば大學を出たものもあり、或は全く學校に入らないものもあるが、大約十七八歳の青年期から七八十の老齢に至るまでを相手にせねばならぬのであるから難一層難である。

二　社會教育の範圍

さて社會教育の對手は此の如きを以て其の範圍は非常に廣く學校並に家庭以外に於て行はるゝ一切の教育事業は皆な此の内に含まれるのであるから僧

智育的方面

倍牧師のせちるゝ宗教傳道は勿論先づ智育の方からいふと、圖書館や書籍縱覽所を設けて公衆智識の增進を計るもの、或は巡回文庫といふて新刊の書籍を購ふて會員の間に巡回して讀んで行く施設も、通俗講演會を開いたり、此頃流行の講習會又は歐米諸國に於て盛んに行はるゝユニバーシテイ、エキステンション即ち大學擴張とも譯すべきことで大學に入らない人々に高尚な講義を聽かすといふやうな組織も此の社會教育である、（これは未だ日本には盛んでないが社會に資する上に於て最も必要なことゝ思ふ、）併し社會教育といふのはこれだけではない美育の方からいふと、繪畫展覽會を設けたり、美術工藝の閲覽會を開いて公衆の趣味を向上せしむるといふことも最も必要なので、智のみに走つて美的趣味のない社會は品格が下劣になるのであるから學校教育に於て智育、美育、德育の必要な如く、社會教育にも智育の外に美育がなければならぬ。是は唯だ繪畫彫刻のやうな、目に見る美術のみでない。耳で聞く音樂も亦最も必要で、公園に音樂堂を設けるとか時々音樂會を催すとかいふのは全くこれが爲めだ。英吉利のマンチスターなどは全市殆んど職

美育的方面

德育的方面

工で毎日毎日機械的に働いて居るから人間が全く機械的になつてしまうといふので土曜日の晩だけは公園に於て盛んに音樂をやり烟火をあげる、演劇もやれば舞踊もあるといふ風で一晩中大騒ぎをして愉快に遊び、こゝに人間生活の面白味を與へる仕掛になつて居るといふ話であるが、これらも亦社會教育の美的方面に屬するものであらう。其外、演劇とか講談とかいふ風のものも亦此の社會教育に屬するので、日本に於て下層の人々にまで忠孝の精神や任俠の氣風を吹き込むだのは確かに講談や演劇の力であるといふてよい。人には模倣性があるから、忠臣義士の傳を聽くとそれが知らず識らずの中に偉大の感化を與へ、任俠の風も亦講談師の舌頭から教授せらるゝことの多いのは熊公八公の末まで國定忠次や幡隨院長兵衛に隨喜するのでも明かである。是等は美育だけでなく德育の方にも力があるが、德育を主とするものは德育的通俗講演で昔から日本に行はれた心學道話、近頃、內務省が骨を折られる報德主義講演の如きもこれである。併し其の道德の根底に入り人心の秘奧を衝いて人生の眞意義に接觸せしむるのは宗教の任務である、されば社會教育

宗教

者としての宗教家の任務は普く智、情、意の三方面に亘りて施設せねばならぬので、宗教圖書館とか宗教博覽會とかいふやうなものも宗教の講演も必要であるのみならず。音樂や繪畫にも宗教趣味を付加し、寺院教會の壯嚴の中にも其の趣味の發展を計らねばならず、法要葬儀の上にも美的感想を逆發せしむるの策を立てねばならぬ、昔の說教が一轉して說教祭文節になつたのも此の必要の墮落したものと見ることも出來る、何しろ社會教育の範圍は皆な宗教家の範圍となるのであるから其の責大、其の任重しと云はねばならぬ。

社會

三　社會教育の目的

社會教育を論ずるには先づ社會といふことを明にせねばならぬ、此の社會といふ語は頗る雜駁に使はれて居るが、正當に考へると二人以上の協同生活で、それが秩序ある渾一體となつて有機的に且つ人格的になつて居るのを指すので矢張り一定の目的を以て進んで居るものです。其の目的は何であるかといへば則ち宇宙の理想で眞善美の顯現であるといふて差支はない、人類は

社會と教育

其の目的

實に此の眞善美を追ふて進んで行くもので、人類の協同生活たる社會も古より今日まで漸次に此の理想を顯現して來たので人類の歷史は此の理想追求の歷史で、社會の活動は實に此の目的に向て進むのにある。されば教育といふことは人をして此の社會生活に適當なるやうに導くので、佛蘭西のギユーは教育とは個人生活をして社會生活に合體せしむる術であるといひ、有名なベルゲマンは教育の目的は人々の固有して居る社會心を發揮するのにあると云ふて居る、それらの研究は專門家に讓つて置いて、私は社會は宇宙の理想を標的とし個人をして此の社會の標的に出來るべきだけ近づかしむるといふことが目的であると見て差支はなからうと思ふ。即ち過去幾千年の間、人類が社會の進化につれて得來りし一切を現代の人に移植して後代發展の基を啓かしむるのにあるのであるから、先づ遲れたるものを導いて現代の人として恥しからぬ所までに教へ込むといふのが教育の急務だ。學校でも家庭でもそれをやつて居るのであるが、社會の進歩は刻一刻も止らぬ、漸く學校を出て現代の人として恥しからぬだけのことを習得したとしても、そこに止つて居

社會教育の誤解

ると社會はズン〳〵其の人を置き去りにして進んでしまう、かくて此の時代後れの人間が澤山出來れば出來るだけ其の社會は進歩が遲れるのであるからこれを教養して行くといふのが社會教育の主眼ではあるまいか。

社會教育の範圍は廣く其の施設は萬端であるが、必らずしも皆なが皆なまで此の目的に向て居るとは云へない、彼の通俗講演や圖書館のやうなものは此の目的であるが、演劇や講談になると其の目的は娯樂にあるので、如何に俳優や講談師が威張つても、それを以て直に教導職なり教育家なりといふ理には行かぬ。此頃心得違の俳優や講談師が自ら社會教育家なぞといふて居るが、若し彼等をして社會教育の目的にのみ向はしむれば藝術の目的といふものは破れてしまう。彼等は何處までも藝人で、それが社會の教育に貢献する所があつたとしても、それは間接の副産物で、此間接の副産物を目的としては藝術の美といふものは發揮出來るものでない。勿論趣味の向上も社會教育の一目的であるから彼等の藝術にても之れに背反するといふことは喜ばしきことではないが、元來の目的は娯樂にあつて教養にあるのでないものは直に以て社會教育の施設とはいへぬ。しかし藝術以外に單に社會教育としてこれらの方法を執る場合もないではないから一概に論定することは出來ないが、到底是等は間接的のものたるを免れない。

國家組織

四　社會の三大機能

社會の漸く進歩して體制を具へて自ら統治するに至つたのを國家といふ、即ち國家といふものと單に社會といふものとの差は此の統治機關の有無にある。統治といふことは統治者即ち君主とか大統領とかいふものと被治者即ち人民との二つの要素から成立するので、此の二者の關係は昔は全く宗教的で、統治者を以て神なり若くは神の代表者なりと思惟して其の意のまゝに人民を支配して居つたので、其の時代に於ては政治上の主權者は直に社會教育の源泉となつて居つたのであるが、漸次社會が複雜になつて來ると治者と被治者との關係は單に德教的では定められず、治者は國家社會の協同生活并に其の進歩發達を計らん爲めに法律を制定し、之れを實施し、其の實施を妨害し、

法の規定に背くものを制裁する立法、行政、司法の三權確立して治者と被治者との關係は法律的となる、併し人類の社會は是れ等の政治的體制のみで滿足するものではない、既に生くる以上は食はざるべからず、食ふ以上は經濟關係といふものがいる。この經濟的の組織によつて人は生活の資用を定めるので國家として個人として皆な其の生產、交易、分配等の事項を便宜ならしめ以て其の協同生活の利を受け、此の社會をして理想に近づかしむるやうの施設を企てねばならぬ。併し社會は唯だ此の政治と經濟との二大體制のみを以て滿足せらるべきものではない。外に今一つ重要なるものがある、それは教育である。教育の目的は人をして現社會の成分として差支ないやうに仕立てるのので、昔のスパルタなぞではスパルタ國民として差支ないやうに仕立てるには男子を悉く公共の學校に起臥せしめて武斷的教養を施したものも、維新前各藩が其の藩風によつて武士を教養したのも、今日學校教育の精神もこれである。即ち國家が强て國民を教養して其の國家社會の一員として差支ないやうにするのが義務教育で、更に現社會を進歩せしめ發達せしめんが爲めに專門の研究を事とする學校も國家の施設として出來て居る。併し國家の施設として出來て居るのは主として學校教育で、學校以外の教育といふことには手を出すことが少ない。其の學校教育なるものも如何に强制しても尙ほ不就學兒童あるを免れないので、現に二十三萬五千餘の不就學者は今日のやうに嚴しい教育制度でもあるのであるから。教育のことは單に國家にのみに托して置くことは出來ない。否な國家の力のみで完全に出來ると思ふて居るのは經濟上の發展を單に國家の力のみで出來ると思ふと共に大なる謬見である。併し國家は學校以外の教育に於ても之れを奬勵するの義務あると共に又監督するの權利がある、個人の施設に於ては完全に成り難き圖書館や博物館を設置し、又は博覽會を開く等のことは國家のなさねばならぬことで、彼の社會の風教を害する言論や出版を禁止するのも亦此の任務より來つたものといふことが出來る。これから少しく社會教育の歷史を尋ねて見やう。

五　社會教育の變遷

宗教と教育との分化

田舍の荒物屋には紙もあれば筆もあり、石油も賣れば蠟燭もあり、反物も賣れば煙草もあるが、都會に出るに從つて分化が行はれて紙屋は紙屋、筆屋は筆屋乃至反物屋は反物屋、煙草屋は煙草屋となる如く、社會の未だ開けない時代には政治も教育も皆な宗教と混在して居つたのであるが、政治先づ宗教から離れて政教相資の時代となり、終に全く手を斷つて政教分離となり、初めは政治も宗教も國家中心であつたのが、宗教の方は人道主義超國家的主義となつて宗教と政治は其の目的とする所が異つて來た、そこで教育も亦國民の教養を中心とするものであるから宗教とは離れざるを得なくなる、宗教は世界的であつて解脱が目的であるから其教化は個人的で、所謂應病與藥の主義で、感冒のものにはアンチヘブリンでよいが、重病にはモルヒネも用ゐねばならぬことがあるが、國民教育は國民をして同一摸型にまで教養するのが目的で即ち其國民として恥しからぬ程度にまで仕立てるといふのであるから一般的である、教育の方は世間的であるが宗教の方は出世間的である、是は國民教育の上からいふたのであるが、社會教育の方に於ても其初めは全く宗教家の手に屬して宗教以外に教育なしといふ狀態であつたものが、政治機關が整ふと國家は三大機能の一として教育の機關に手を下すが、世が亂れると又此の方面が第一に御留守になつて全然宗教家の手に任されるやうになる、中古の歐羅巴の暗黑時代に學問のことの全く教會の中に隱れたるが如く、我が國も中古の戰國時代には學問といふは僧侶のみの致すことゝ心得るは以ての外と織田信長が部下に示した如き狀態で、曾ては儒臣小野篁に經營せられた足利學校も全く僧侶の手に落ちて沙門以外には教育といふことも出來ぬ有樣であつたが、德川氏天下を統一して心を學校の興隆に注ぎ、こゝに儒教の勃興となり、藤原惺窩、林道春を初め木下順庵、新井白石、荻生徂徠といふやうに學者輩出し各藩も亦學校を立てゝ武士の子弟を教養することゝなり、殊に水戸弘道館、金澤の明倫堂、鹿兒島の造士館、仙臺の養賢堂、熊本の時習館、萩の明倫館、福岡の修猷館等は有名なるものである。併しこれらは何れも武士の教育で武士以外に對して藩としては何等教育の施設がなかつたといふてもよい中には武士以外のものをも教養した福井の正義堂のやうなもの

國民教育と宗教

もあつたが、（中間廢絶して後明道館となり又明新館と改む）多くは庶民には及ばなかつたので社會教育は全く民間の手に委ねられた。而して之れを引受くべき僧侶は朱印黑印に安んじ、宗判制度の爲めに戸籍吏同樣となり、死人取扱以外に社會教育なぞといふことには眼を注がない。勿論說教は眞宗を初め諸宗にも行はれたが、それは主として出世間的の法談で、世間的の教育といふことは交渉が少ない、交渉が少ないとはいふものゝ人倫の大道も多く此の僧侶の手で普及せられたといふても差支はない。幕府の中葉に至て神道の方でも通俗的の傾向を以て平民傳道に目をつけるといふ勢ひであつたが、これとても充分でない、此の時に當つて社會教育を主眼として、起つたものが例の心學である。

武士教育

六　社會教育史の瞥見

心學の起つたのは餘程後ですが、戰國時代からボツ〳〵起つたものが軍書讀みでこれは後醍醐天皇の時、北條討伐の爲めに行はれた無禮講の席上で玄慧法師が漢の史書の講義をしたのが通俗の字義の講釋でなく達意的に面白く讀み聞かしたのが始りだといふことである、其後太平記が出來てからは之れを讀み聞かせることが戰國時代に行はれ德川時代になつて盛んに行はれたもので、浪人の武藝を以て立つことの出來ないものが衆人に此の太平記讀みをやつたもので、其外に御記錄讀みといふて德川氏出世のことを書き記した書物、三河後風土記や難波戰記などを讀むだので初めは家柄の武士で社會教育を主としたのだが、太平の續くにつれ文學も起つて單に記錄讀みでは聽衆もなくなつて愉快に面白く、主として娛樂的にやることになつて終に今日の講談落語の源を爲し、八代將軍の頃には瑞龍軒や志道軒などといふ斯界の名手が出たのである。併し漸次社會教育の目的は疎になつて、德教といふ事は相離るゝやうになり來て、中には諷世罵俗の面白いものもあり歷史教育の一助となる軍談もあつたが、大體の目的が一種の錢儲け主義となつてしまふた。

心學は全く趣を異にして當初より通俗講話を旨とし巧みに神儒佛三道を調和して修身齊家の道を語るを事としたので社會教育以外に何等の目的もなく

講談落語

心學

幸に金儲主義に墮落することもなかつた、此の心學といふものは享保年間石田梅巖が京都に講席を開き、本心を見得して性善を發揮すべしと主張するのが中心思想であるから心學と名けるので梅巖、曾つて當時の儒者が文字訓詁に沒頭して學問の眞旨を沒却するを慨し、

蓋し書物を讀みて書の心を知らざれば學問と云はず、聖人の書は自ら心を含めたまふ其心を知るを學問といふ。然るに文字ばかりを知るは一藝なる故に文字藝者といふ。

と、文字藝者多くして實用に疎なるの時、彼れは此の心學道話を以て社會を化導せんと企てたのである、梅巖の門に手島堵庵あり、堵庵の門に中澤道二あり、初めて江戸に下り平易の辯を以て甚深の理を說き、心學これより關東に行はるゝに至つた。今其講談振を紹介すると、先づ

寢る間のみ人にかはらぬ思ひ出を浮世にかへすあかつきの鐘

寢た時、何かあるぞ、釋迦も孔子もない、鎌坂長範もない、犬も猫もくうくうばつかり、十萬石、百萬石もない、玉樓金殿もない、金銀財寶もない、宮も藁屋も穢多も乞食もくう〳〵は同じことぢや、寢た姿を外から見ればある或は親子ともに寢て居る、母親もあり、乳呑兒もあり、外から見えても寢て居るものは何も知らぬ、物の見事に消えて居る、少しもおれが〳〵はない。天地同根同性、丸で我なし虛空一體。此時初めて知る、衆生本來成佛なること、よく〳〵考へてごらうじませ、これ尊き御姿ぢやぞへ、扨て目があくと浮世にかへす曉の鐘、かれがごんとなると、直に今日の上が道ぢや、雀は雀の道、烏は烏の道、チユウ〳〵カアカア、柿の木に柿が出來、栗の木に栗が出來る、此外に道はないぞ、神道といふも佛道といふも儒道といふも此事ぢや云々。

といふ風である、其外、柴田鳩翁などといふ名手が出て盛んに平民傳道を試みたものだ。

口の方の社會教育は以上の如しであるが、筆の方を見ると日本の社會教育は假名の製作に負ふ所が非常に大なるを忘れてはならぬ。若し日本に假名文字がなかつたらば教育は必らず一部に限られて普遍なることが出來ず、文學も全く貴族的となつて平民的たることは出來ない。日本に平民文學が起つたのは全く此の假名の功力であるといふは否定すべからざる事實で、今でこそ

道歌

古文學となつて難解いものだが、其頃は堂上人以外の人にも容易く理解することの出來た源氏物語とか榮華物語とか、これらは純文學として直接社會教育に與からぬとしても源平盛衰記や平家物語、それに少し下て太平記等の書籍は鎌倉時代幷に戰國時代の武士道の經典として用ゐられ、高僧碩德の法語類、例へば明惠上人のあるべきやうや、夢窓國師の聖財集の類も、社會教化の好資料となつて居つたので更に簡單なものをといふと、道歌とて僅に三十一文字にて教訓の意を含めて、口を戒めては

三寸の舌にて五尺の身體をば養ふもあり失ふもあり

強慾を戒めては

よくふかき人の心と降る雪はつもるにつけて道を忘るゝ

少慾を語りては

世を渡る道はと問はゞとにかくに慾の淺瀨を行けと答へん

といひ、一層通俗に碎けては

世の中は何のへちまと思へどもぶらりとばかりしても居られず

發句

己が身に火事がいくなら堪忍の屋根から消せよむねのほむらを

といふ如く言外に些かながらも面白味を持つて人を化導する、道歌よりも字數少くして趣味の却て深いものは俳諧で、これも純文學の方は今こゝに言はず、其の教化に緊切なるもの二三を擧ぐると

物言へば唇寒し秋の風

ある智慧をかくしかくして遲櫻

くちなしの花にも恥ぢよ行々子

うきことに馴れて雪間の嫁菜哉

氣に入らぬ風もあらうに柳かな

の類、これは心學者流の好んで使つたもので日本には三十一文字や十七字の詩があるので平民にも文學趣味が鼓吹せられ、それが又た社會教育の上に力を與ふることゝなつた。

併し道歌や俳諧の教化は一部に止つて社會教育の全般に亘るものとはいへなかつたが、明治になつて新聞雜誌の類が盛行して一面に於て此の社會教育

を助くることゝなつた。我が國の新聞の初まりは德川時代に其日其日の出來事を瓦版に刷つて讀賣をした讀賣と名くるものにあるが、新聞らしいものゝ出來たのは安政年間に支那の香港で發行する『遐邇貫珍』といふものを筆寫したのに初まり、文久年中に『中外新報』や『六合著誌』といふものを翻刻して居つたが、これらは皆な漢字新聞で、其の外には和蘭新聞を翻譯したパタビヤ新聞といふものもあつたさうだがそれが一般的になつて直接に今日の新聞紙の基と云はれるのは元治元年四月に岸田吟香等が横濱に於て『新聞紙』といふものを出したのが嚆矢でこれは全く日本文で、其後慶應年間に『萬國新聞紙』『もしほ艸』等の木版刷のものが出て明治になつて初めて活版刷のものを生ずるに至り、こゝに社會教育の一面を負擔するに至つた。史上の瞥見はこれ位にして更に其教育方法を語らん。

七　社會の心的方面

社會といふものを一つの有機的活動として研究するに至つたのは極く新らしいことで、これを一の科學として組織したのは十九世紀の前半に於て有名な佛蘭西のオーギユスト、コントで、此の人によつて初めてソシオロジー即ち社會學なる名が與へられた。それより英のスペンサーとか獨逸リヽエンフエルドなぞが出て漸次其學が發達し、社會は單に有機團體なるのみならず、一つの精神あり人格あるものと見らるゝに至つて社會心理といふことが考究せられ、輓近の社會學者に於ては社會の心理研究が盛んになつて社會組織の根底をも心理的に見るやうになつてタルドは模倣を以て社會結合の要件とし、ギッデングスは同類意識にあるといふて居る、それらの研究は社會學の領分に入るからこゝには詳說せぬが、今日學者のいふ所を綜合して社會成立の要素を擧げると、心的要因とも見るべきものは先づ第一に人は一人一人では生活の利便を得ることが出來ず、外敵に對して能く其の種族を保存して行くこともも出來ないし、且つ人類自然の情操なる善を求め、美を求め、眞を求めるといふことも出來ない、此の人類の慾望は終に吾等を促して社會を生せしむるに至つたので、ワード氏は之を物質的と精神的とに分類して

社會發生の力

社會發生の力
- 物質的
- 精神的
  - 倫理的
  - 審美的
  - 智力的

自己保存
種族保存

として居る、かく人々相依るに至ては此に同類意識といふものを生じ、人々互に其の類似點を自覺して我も人なり彼も人といふ考はやがて同情となつて其の組織を鞏固にし、次ぎには互に模倣してこゝに一つの社會氣風を生じ他の氣風を異にし、團結を同うせざるものと競爭して內ます〳〵其の團結を固め一社會の心となすもの、例へば國民性とか種族性とかいふものを生ずるので、これらの心的方面を助くる外部の要因は一氣候、二地形、三地質等の物質關係、それに加ふるに人口の多寡等があつて社會は出來るので、地上に人あり共同して生活するといふ時には其處に其の協同の精神といふものがあつて一個人の精神と異る、外患なき時は內憂起るで、家內同志で居る時には喧嘩もし口論とするが、外から盜賊でも入つた時には一致してこれに當る、此の一致する所に社會精神といふものがあるので、社會の心とは社會の成分たる個人の心の集合してそれが互に影響して動く上にあると見てよい。

社會教育の對象は社會にあるので、丁度兒童教育に於て兒童心理の研究が必要である如く社會心理といふものゝ研究を怠つては到底社會教育といふものが出來るものでない。是は社會教育だけには限らぬ、學校教育に於ても矢張此の社會といふことに眼を注ぐといふのが近時の大勢でナトルプとかベルゲマンとかいふ教育學の大家は個人は社會に隷屬するものであるから教育といふも社會の目的を達するといふことを第一とせねばならぬといふ風に論を立てゝ居るのであるから況して此社會を相手にする上に於ては充分に視察せねばならぬ。

八　社會心理と教育

さて其の社會の心は個人の集合より成り其相互活動の上に於て現はれるのであるが、既に社會の心となつた以上は個人の心とは頗る趣を異にする、一

人の時にはさほど感激し易くない人でも多數打寄つた時には人が違つた程のことをやり、サアやッつけろとでもいひ出すと群衆は烟に卷かれてやつてしまう先年の日比谷事件の電車燒打の場合も其の首謀となつた人には何等かの考があつたかも知れぬが、其の首謀に暗示を與へられて殆ど催眠狀態に陷たやうに無我無中に働いた連中は必らずしも深い個人意識があつてやつたのではない、これらは群衆の上に現はれた心理狀態で、狂人走れば不狂人も走り、用のないのに驅け出して騷ぐ野次馬なぞといふものも實に群衆心理の一表現に過ぎない。即ち群衆は個人よりも感し易く動き易い、學校騷動や同盟罷工も一人づゝ呼んで諭して見ると容易に治まることも多數を一所にするとなか治らない、といふも此現象の外はない。ソコで社會教育に從事するものは此短所に着目して諄々として理を說くよりも感じ易いといふことを主とせねばならぬ、人は個人個人の時よりも群衆となると理解力が粗雜になるものである。靜かに考へれば解ることでも多數になると唯だ感じ易くなつて理窟なぞは耳に入り難い。それは即ち群衆心の一特色として、模倣といふことが

暗示

理解力の粗雜

模倣

あるので個人だけには此心理狀態は微弱だ。が社會となつた上からいふと、彼のタルドが模倣を以て成立の要素といふた如く、人は模倣をする動物、否な模倣といふことが人類をして能く今日の文明を維持せしむる所以に外ならぬ。吾等が今日使ふ言語や文字も皆な自家發明のものでなく、先人の遺物、現代の人々の使つて居るのを模倣したのであり、其衣服食物に至るまで皆な模倣である。これに無意識的の模倣として自分は必らず眞似やうと思ふのでないが知らず識らず模倣するのと、意識的といふて一人之れを爲したから吾も亦かくせんとして模倣するのとの區別もあり、又は殆んど催眠狀態になつて他の暗示によつて動くのもある、演壇に立つて辯士が手を握ると聽衆も思はず手を握り詰めたり、一人が拍手すると他のものも何の氣なしにパチ〳〵と拍手するといふのも此の現象である。されば社會教育に從事するものは之れにも注目して他をして自己に模倣せしむるといふことが必要である、或る意味からいふと教育は一種の模倣で、自己の知る如く知らしめ、自己の感する如く感ぜしめ、自己の行はんと欲する如く行はしむるにあるから模倣の心理

社會教育と模倣

は社會教育家の鄭重に視察せねばならぬ所である。

模倣は今いふた如く無意識的又は意識的に行はるゝのであるが、此の外に自覺的模倣といふのがある。これは其の事の果して模倣すべきか模倣すべからざるかを批評して模倣するを自己に利益ありと認めた時に初めて模倣するので無意識的模倣の如く盲目的のものでなく、單に彼れも爲さゞるべからずといふやうな淺薄な意識でなく考量一番して模倣するので、これは少し年の長けた人、即ち分別ある人の模倣である。社會教育の對手は分別のない盲目的模倣の人ばかりでなく、此の分別のある自覺的模倣をする人もあるのであるから唯だ感情のみで他の模倣性を激發したからとてそれで教育の目的が達せらるゝのでない、これらも亦教育者の注眼點である。

更に他の方面から社會心理を見ると遺傳と順應なる一般生物界の原則は社會なる有機體にも行はれ、其の心的生活に於ても遺傳と境遇によりて個人の性格を異にするが如く、社會心相を同うせず、前時代より傳はれる傳說習慣風俗は知らず識らずの間に現社會に模倣せられ、周圍の事情境遇の變化は又

心的潮流

諸種の流行を來して意識的若しくは無意識的に模倣せられ其の自覺的なるものは輿論となつて一方に起り、其起りたるものは他に一種の暗示を與へて急速に傳播して模倣せられる。日本國民に忠孝の思想が如何なる場合にも忘れられざるは吾等が祖先より遺傳し來れる社會心理で、それが戰爭とか何とかいふ場合には勃然として起るのは周圍の事情によりて激發せられたのである。これを有形的の些末なことで云へば或る時代には特殊の言語が流行るといふのも此の事情から起つたのであり、又は帽子や外套に流行があつて、流行脫れのものを着るのは何んだか恥かしいといふのも此の模倣心理の現象である。維新當時に勤王攘夷の聲が輿論となつて津々浦々に傳播し、明治十二三年頃に自由民權の說が諸方に行はれたのも亦此の自覺的模倣の發動に外ならぬ。社會教育に從事するものは能く此の社會精神を理解して居らぬとトンダ失敗をすることを免れない、何にも此の社會の心的潮流に媚びて阿世の說を立てよといふのではないが、物は言ひやうで、譬へば人に忠告するとしても、『どうも君は感心だ、感心は感心だが、此處が惡い』といへば耳を貸す氣に

地方精神

なるが、これを反對に『君はよくない、怪しからん、併しこれはよい』といふては最初に反感を生じて居るから、後で感心だといふても耳には入れない、況して個人よりは激し易い群衆を相手とするのであるから最初に反感を買つては、其後のことは聞いて呉れない、それだから先づ時代精神の趨勢を看取して徐ろに自己の言はんと欲する所をいふといふのが良策である。或る進歩黨の政治家連が反對黨たる政友會の盛んな地に入つて演說をした所が、第一席の辯士は先づ口を開いて該地方人士の政治思想のないのを慨し、權勢に阿付する政友會如きに入るを詰りかけた所がノーノーの聲盛んで充分に演說することが出來ずに引込む、第二席も亦た冒頭政友會の非を難じたものだからノーノー、引ッ込めとやられて其說を盡くすことが出來なかつた、ソコデ第三席の辯士は一工夫して登壇第一に其地の各藩主の功績を論じ藩祖たりし人の氣骨稜々權勢に阿付せられなかつたのをいふて徐ろにかゝる藩主によつて支配せられたる當地方の人士が……とやつたので反對するものもなかつたといふ話がある。これらは能く群衆心理の歸嚮を看取して、地方精神を利用したものと見ることが出來る。

以上は主として模倣に就て云ふたのであるが摸倣ばかりが社會心理の狀態ではない、人は唯だ他を模倣するの外に自ら一新機軸を出して此の社會に順應して行くといふ狀態がある。即ち新を追ひ新を競ふといふことだ。一人新を出すと他はこれに模倣する。即はち嶄新氣拔を愛するも確かに社會心理の一現象で、陳腐は以て人を傾聽せしむるに足らぬ、

科學智識の通俗化

九　專門智識の通俗化

社會教育の一般目的は既に述べた如く、個人をして社會の成分として其の共同生活を助け進步發達に貢獻せしむるに足るだけの資格を養はしむるにあるが、其特殊目的をいへば智育に於ては常識の發達に着目して其の成員として恥づかしからぬ人たらしむるにあるので、それには一般社會の迷妄なる信仰を破つて健全なる智識を得せしむるにあるので、消極的には迷信の勦絕、積極的には科學的智識の通俗化である。健全なる信仰を缺きて徒らに迷信に

流るゝ社會の墮落し沈淪するは古來其例に乏しからぬことで、我が平安朝の末期は實に迷信全盛の時代であつた。此時代に於ては人は健全なる理性の判斷によることを忘れて何事も神佛にさへ依賴すればよいと心得、平將門東に叛き藤原純友西に反しても寛朝僧正に御祈禱を賴めば安心だと心得て居つたほどであるから、人心懦弱、士氣頗る沮喪した。

西洋に於ても中古の暗黑時代に於てクリストを信ずるの念は迷妄に陷つて彼の十字軍の時にも我が軍には神の冥助あれば一擧直に異敎を破るべしとて弓槍の用意は疎かにして陣頭に十字架を立てたなぞといふ可笑なこともあつた、これらは皆な科學に反し理性に背いた迷信である、此の迷信を打破するには是非科學的智識を通俗化して公衆に知らしめねばならぬ。天文の理に昧くして天體のことに迷ひ、地文のことに明かならずして地象に迷ひ化學を煉金術と同視し、當然物理學に於て說明し得べきものをも不可思議なりとして居るのは此科學智識が足らぬからで爲に社會の進運を害すること少くない、これを矯正するには科學智識の通俗化より必要なことはない、曾にこれら科學上のことのみならず、哲學智識を通俗化して公衆の思索を深め理想を高からしむるのも矢張社會敎育の手段で、趣味の向上といふことも亦斯道專門の人の誘發に待たねばならず、俗惡なる音樂や文藝に隨喜するものを高尙ならしめ善美ならしむるといふことも社會敎育の一目的で、孔子は詩と樂とを以て敎化の手段とし、佛敎に聲明あるなぞ皆な此の感情的方面の敎育である。

趣味の向上

德育と社會敎育

德育の方面に於ては社會敎育の最も力を盡くさねばならぬ所で、學校敎育の主として智育に於て成功し、家庭敎育の情育に於て功多きが如く、社會敎育に於て最も力を盡くさねばならず、且つ其功をも擧ぐることが出來る所である。人は每々いふ如く模倣の動物で人間の感情には傳播性があるのであるから一人端正なれば一鄕の人之れに模し、一人趣味上れば一村これに赴く、これは人格の感化が大であるが、口舌に於て敎育するに就ては或は史上の事蹟を示し古聖の格言に尋ね、倫理の奧秘を闡いて其專門智識を通俗化するといふことが大切である、即ち社會敎育の一要件は此の通俗化といふことにあるといふてもよい。

十　社會教育と興味

ヘルバルト一派の教育學者は教育の目的を達する教授の方法は被教育者をして其教授せらるゝ事件に興味を起さしむるを第一義として居る。興味といふのは其事を愛好し注意して內心の興奮禁ずべからざる快感で、ツマリ面白くて面白くてたまらないといふ感情を起さすのである、これは兒童教育に於ての立言であるが社會教育に於ては更に一層の必要を感ずる、何故かといふに學校教育は多少强制的で被教育者は嫌でも教授を受けねばならぬやうな組織になつて居るから興味が薄くとも辛抱するが社會教育となると教育者と被教育者との關係が自由で嫌になれば何時でも止めるといふ地位にあるのだから單に專門智識を通俗化して平易に解せしむるといふ外に興味といふものがなければ公衆を引きつけることが出來ない。ソコデ此の興味を深からしむるといふことが社會教育の第一の要件である。それには直接の興味と間接の興味とがあつて出席の多寡によりて賞品を與ふるとか、理解の程度によりて懸賞法を用ふるとかいふのは間接的興味であまり感心する方法ではない、それよりも直接に其の教授せらるゝ事項に多大甚深の興味を持たしめねばならぬ。ヘルベルト派の教育は此の興味を六種に分類して外物を觀察してこれは何であるかとの疑問を起して行く經驗的興味と、外物相互の關係を尋ねて、これは何うして出來た、これとこれとの關係は何うなるといふことを疑ふ上に無限の興味を起す推理的興味と、これは善いとか惡いとか美とか醜とか評價することによつて生ずる審美的興味との三つは共に外物に接して起るものであるが、人の苦を悲み樂を喜ぶといふやうな同情的興味、更に之れを大きくして社會公衆の利害に關して興味を起す所の社會的興味、それに今一つは人の身の果敢なきを思ひ無限絕對の神に對する宗教的興味の如き主觀的に心の中に起るものもありて、皆な以て人の興味を誘發するに足る、社會教育に從事する人は此の興味を誘發して被教育者をして快感を起さしむることを努めなければ彼等は皆な其の教授に耳を傾けなくなる、これ普通に學校の講義より

興味と社會教育

演說の方が面白く教科書よりは一般公衆に讀まるゝ書の趣味多き所以である。學校には試驗であるとか席順であるとかいふ間接興味が伴ふが社會教育には これがない、唯だ被教育者を引きつけるのは直接興味のみであるから頗るむづかしい、否なむづかしいことはないが、これを主とすると勢ひ俗惡に流れる、俗惡に流れずして而かも興味深からしむるのは社會教育家の最も苦心の存するところである。

興味と感化

十一　演劇寄席の影響

廣意に於ける社會教育には教育者として定まつたものはなく、一切の事象が四方八面から社會人心を教化し苟くも其の事の興味を惹くに至つては何人も注意を之れに向け無意識的若くは意識的の模倣となつて不言の感化を與へるのであるから、興味の多いものほど効果も多いが弊害も亦多い。殊に興味を主とする寄席とか演劇とかいふものゝ社會に與ふる功と過とは實に豫想の外にあるもので、俗惡な演劇の盛んな所には俗惡な風習が伴ひ、卑猥な寄席の流行る所には卑猥なことが行はれる、一面からいへば是等のものが其の社會の反映なると共に他面からいふと是等のものが社會に感染して相互融合重々の關係を持て居るので、彼の有名な花井お梅は非常に芝居が好きで殊に澤村源之助が贔屓であつたが、其の濱町河岸で箱屋を殺す折には夢の如き無意識の中に源之助の扮する女性の行動に類したといひ、頻りに十人斬なぞの演劇の行はるゝ大阪に六人斬とかいふことが行はれ、殘忍な犯罪が多いと云はるゝ同地千日前を通過する時には何人も幽靈の看板の一つや二つは見ざることがないといふのも否定すべからざる事實であるし、江戸ッ子氣質に誇る東京下層の人々の娯樂たる講談に鼠小僧や國定忠次の話が歡迎せられ落語に遊廓談の喜ばれ、最も江戸ッ子に喝采せられたる五代目菊五郎や先代小團次は盜兒や遊冶郎に扮するを得意をし、講談の名手先代松林伯圓は泥棒伯圓の名を得たといふ事實に徵しても社會に及ぼす影響の少なくないのが明がである、されば古來の爲政家の中には是等の取締を嚴にし、彼の水野越前守忠邦の如きは諸方に達して風紀の振肅を計り、江戸市中は町奉行遠山左衞門をして、

豫想外の影響

演藝取締

『今般市中の風俗を正すべしとの御注意に依り役者の風儀、芝居狂言、猥褻なる風俗の市中に傳播するは取締上其儘捨置難きを以て悉く退居を命ず』と云はしめ、肥前舊鍋島藩の如きは領内に於て演劇興行を禁じたりといふ、これ角を矯めて牛を殺すに似たりと雖も、風教上爲政者が是等のものを輕視すべからざるを示して餘りあるのではないか。試に近者三都に於ける主要なるものを見るに（明治四十二年十月興行）東京にても忠孝幷に武士道に關するもの十三、

如何なるものが行はるゝか

忠臣藏（明治）　日本晴伊賀仇討（市村）
勤王娘（眞砂）　弓張月源家鏑矢（宮戸）
忠臣藏（三崎）　維新前後（同）
安宅勸進帳（同）　義士銘々傳（國華）
三蓋松（開盛）　神崎與五郎（同）
近江源氏（深川）　軍旗（本郷）
木下蔭狹間合戰（春）

京阪に於ては天滿座に於て桃中軒星右衛門一座の浪花節義士銘々傳あるのみ、强ひて此の中に算するを許さば、京都千本座に於ける梅魁天神利生記

位である、立志に關するもの

東京には、

二宮尊德（本郷）　空中飛行機（有樂）

あるに京阪には之れ亦强ひて算すれば大阪中座幷に文樂座の錢屋五兵衛ある

のみ、

戀愛劇は東京には

艶姿女舞衣（宮戸）　新不如歸（開盛）

大阪には

源氏夕顏（角）　新種園朝顏（文樂）
江戸土産戀錦繪（本町）　新種園朝顏（同上）
小三金五郎（常盤）　比翼塚（同上）

小夜嵐（春日）

といふ振合である、以て東西兩都の思潮を見ることが出來るではなからうか、もとより演劇や寄席を直に社會教育の機關たらしめんとするのは大きな誤であるが其社會教育に關係するの大なることは見逃すことが出來ない。

十二　演劇寄席の改良

演劇幷に寄席の社會教育に影響する大なるを知らば其の改良的施設は社會教育家幷に經世家の等閑に付すべからざることたるは敢て多言を要しない。然らば如何に改良すべきかといへば其の根本要義は彼等藝人の品格を向上せしむるの外はない。品格向上といふたからとて彼等をして悉く聖人君子の域に進めしむるなぞといふことは出來ることでもなく、又望まるべきことでもないがせめては藝の爲めに藝を研くといふ氣風を養はしめたい。世評はさまざまであるが兎に角昔の河原乞食時代の俳優と今日の俳優とは其品格の上に幾分の向上のあつたことは明かで、殊に明治の名優故團十郎の如きが神道教

導職に列して素行を謹んだなぞは彼等社會の風紀の上に好影響を與へたに相違なく、一面普通教育の普及は彼等の中に眼に一丁の字なきものが少くなつたが爲めに幾等か藝術家たるの自覺を生じたのは事實であるが、今尚ほ社會の見る眼も低く、俳優自身の品格も下劣だ、大劇場の俳優は多少世評に支配せられ人氣に關するが故に謹む所があるとするも、小劇場の俳優若くは地方廻りの俳優の如きは殆んど風教紊亂の源泉を爲して居る。彼等は藝術の神聖を忘れ徒らに媚を俗衆に得んとして墮落劣惡實に言ふに堪へない。一概に寄席藝人といふ中にはいろ〳〵な種類があつて同列に論下し難いが、其中で比較的品格のあるのは講談師で之れはさしたる害もないが無學文盲聞いた風なる に至つては實に驚かざるを得ない彈丸黑子の戰中だとか、源平のことを知るのは源氏物語と平家物語だといふ途轍もないことを臆面なく喋るのであるから多少の讀書力と常識位は養はして置かないと無學の早學問と稱せらるゝものだけあつて不測の害がないとは云はれぬ、落語家には品性の下劣にして無學なるもの多く、故人三遊亭圓朝や故談洲樓燕枝の如く自ら落語や人情噺を

述作するものは今日の所絶無で、陋劣なる落語や古人の種本によつて漸く御茶を濁して居るばかりで以て時代の進運に伴ふことが出來ないのみならず、其の品格と來ては殆んど論外で、客受を事とし割問を主とし藝術とか話術とかいふことに心をかけて居るものは無いといふてもよい。兎に角間接ながらも之れらが社會教育に影響するといふことは頗る痛心のことではないか、女義太夫に至ては妙齢の女で藝よりも顔を第一とし其の語る所のものは男女の戀愛だから風俗壞亂を誘致するに最も力があつて東都の學生が其爲めに墮落したものは枚擧に遑あらずだ、されば彼等の人格養成といふことは刻下の急務で、其の利は此頃宗教家において行はるゝ遊廓傳道に優ること萬々であると思ふ遊廓傳道も結構な思ひつきであるが遊廓其者が罪惡の府で、彼等の人格を向上せしむるは廢業さすより外はないのであるから痛切に眞面目に根本的に教化するといふことは出來ない、これらは寧ろ社會政策として賣淫其者を禁遏するの優れるに如かん、たゞ根本的のことは政治家に任して宗教家は唯一時的の慰安に傳道するといふのであるから吾等は藝人傳道のこれよりも痛切に必要にして且つ其の効果が著大であると信ずる、今日の宗教家が一人も眼を此に注がないのは一大缺點であるまいか、

以上は藝人人格の上に就ていふたのだが次ぎに必要なのは脚本の改良だ、

今日の如く戀愛劇、盗賊劇、妖怪劇ばかりでなく社會の趣味向上に資するの脚本を演せしめたい、かく云へばとて吾等は劇場寄席を學校扱にし所演の技藝は必らず勸善懲惡主義でなければならぬといふやうな窮屈な議論をするのではない、藝術は美の鑑賞を目的とするのであるから一から十まで道德律を以て支配することは出來ないが、徒らに實感を挑發して美の約束に背くの劇若くは殘忍に過ぎて人をして嘔吐を催さしむの劇を避けんことを望むのである言を換へていへば唯だ俗衆の好奇心や一時的喝采を目的として審美上に何等の價値なきものを除かんと欲するのである、幸田露伴氏曾て『一國の首都』なる長論文に於て演劇に論及していふ、

都會の無形上の情狀を好良ならしめんと欲すれば施爲すべきこと極めて多きが中に、都會の士女が最大娯樂の處とするところの劇場に於て演ぜらる

脚本

改良の必要

るものゝ性質をして善ならしむることは甚だ重要なることの一として算すべきや論なし、聖人今出でなば予ほ必ず其詩を刪するの筆を擱きて劇を善ならしめんことを冀ふべきを信ずる也。

と、講談の讀物、落語の種本に於ても亦實に此通りである。

十三　新聞雜誌の勢力

新聞の勢力

印刷術の未だ開けざる時代には社會教化の機關は文書に依賴することが疎であつたが、印刷術の進歩は文書の傳播を利便にし教育の普及は目に一丁の字なきものを少くしたから新聞雜誌の直接又は間接に社會教育に影響することは到底見逃すことが出來ない。若し夫れ今日の日本に百萬の讀者を有する新聞ありとせよ、其の言說は直に社會に影響し、小は世の流行を左右し、大は國の輿論を上下し、爲政者をして一敵國の想あらしむるのは難いことではない。神經質なる爲政者は新聞の一顰一笑に苦心し、多血性の青年は雜誌の一言一句に動く。

社會上の一大勢力

一概に新聞雜誌といふ中にもいろ〳〵あつて純然たる意見發表の機關もあれば營利を專門とするものもある、或は宗教的のものもあれば學術的のものもあるが既に賣つて以て多數の讀者を得んとするものは通俗平易を旨とし嶄新奇拔を要とし、巧に讀者の興味を惹かんとするは免れざる所だ。此巧に讀者の興味を惹んが爲に揑造せられたことでも一たび新聞紙上に印行せられると、それは非常の力となるもので、リーバー氏の政治道德學に「たとひ新聞紙は單に讀者を喜ばしむる爲に刊行するものなりとするも、同一の記事反覆し之を衆人に告知するは自ら一の勢力なり、殊に記者の德義資格世人の信用なき場合に於ても印行せられたるものは一種の信用を有するものにして口を以て談話せらるゝよりは注意を惹くこと大なり」とある如く、新聞紙は社會上に一大勢力を以て居るのであるから其の墮落と俗惡とは社會を惑亂するものと云はねばならぬ。書く記者には何の心もなくとも書かれた當人に取つては畢生拭ふべからざる屈辱を蒙ることもある、リーバーは又、「新聞紙は人の私行に關して記述する機會を日々有するものなるが、之を濫用するは不正のこと

にして紳士の行爲にあらず、誹謗は些細なりとも罪惡なれば新聞紙上に於ては殊に然りとす」と新聞の勢力此の如きを以て之れを社會教化の上に利用する時は其功頗る大なるのである、今日我が日本人の常識養成の機關は此の新聞に過ぎたるはない。彼等は之れによりて世界の大勢を知り國家の急務を察する、ヤレ火星が地球に近づいたとか云ふ天文現象も、淺間の噴火、濃尾の地震といふ地象も、井伊大老の五十年忌だといふ歴史も、飛行機の發明といふ理科の智識も皆な之れによつて教養せられて居るのである。されば新聞記者は社會文化の發展上多大の責任あることを自覺して一言一句も忽にせざる德操を以て紙に臨んでもらひたい、勿論新聞紙は教科書ぢやない、唯教ふるのみで少しの興味をも與へなかつたらば誰も讀むものがない、讀むものがなければ勢力もなくなるのであるから是非俗衆を引き付ける興味は要る、されど其興味は高尚なものでなければならぬ、徒らに俗衆の好奇心に投ぜんとし又は其嗜好に阿つて社會教育家たる天職を忘れては社會教育上害あつて利なきものになつてしまう、これ實に筆を新聞雜誌に執るものゝ心得ねばならぬことである。

十四　社會教育と文書

社會教化の上に於て勢力あらしめんとするには、通俗化と興味との二條件を具備せなければならぬは既にしば〳〵述る所の如く、若し此中の一條件だも缺如する時は其奏効頗る覺束ないのである。通俗でなければ教化の範圍狹く興味を缺けば之れに來るものが少い。高尚な新聞雜誌の賣行き惡くして通俗になるほど賣行きの好いといふのも明かに此事實を證明して居る。哲學雜誌だとか人性だとかいふ專門のものよりも同じ哲學のことが書いてあつても一般には東亞の光の方が宜く賣れ、丁酉倫理講演集の方が歡迎せられ、同じ歴史でも專門家の書かれたものよりは通俗的に書かれたものゝ方が喜ばれる重野博士の國史眼は價値あるものに相違ないが其賣行は竹越氏の二千五百年史に及ばぬ。これを昔に見ても維新革命の原動力となつて勤王の大義を鼓吹したのは水戸の大日本史が有力なものであらうが、其實は賴山陽の日本外史

通俗と興味

に及ばざることが遠い、これらは一は專門的で他は通俗的であり、一は文章が枯淡で興味が少ないが他は文章が絢爛で興味が多いからである、其又日本外史も漢文學の衰へた明治になつては通俗日本外史といふやうなものに及ばなくなる。同じ文學雜誌でも帝國文學や早稻田文學よりは新小說の方が賣れ新小說よりは文藝倶樂部の方が持囃されるといふのも此の消息を洩らしたものであり、曾ては振假名のなかつた新聞までが今日では振假名を用ひ、前には理窟ばかりいふて居つた新聞が次第に平易になつて來たといふのも明かに此傾向を示したもので、現に四五年前までは一部同好の人にのみ讀まれて居つた國民新聞が今日多數の讀者を有するに至つたのは通俗化した爲めである といふことは明かな事實である、處が此の通俗化といふことは終に世に阿り俗に媚ることゝなつて却て敎化を傷くるやうな現象を呈するに至る、これ實に社會敎育家の心すべきことで單に營業といふことに眼をつけて其以外に何等の理想もなく抱負もないものはイザ知らず苟くも社會改善といふことに心を注ぐものは最も警戒せねばならぬ所である。それは敎化の上からいふても

敎育と營業

營業の上からいふても多く賣れるといふことは利益あることに相違ないが、敎化と營業との見地の異る所は單に賣れるか賣れぬかの外に、其賣れることが社會敎化を助くるか否やといふことを考量せねばならぬ。賣れることは多く讀まれることで、多く讀まれることは多く敎ふることである代りに、其の記載の事項が惡しければ多く讀まれることは多く害を流すことゝなる、賣るのが手段であつて敎ふるのが目的である、手段の爲めに目的を誤るものは社會敎育の文書として正當なものとは云へぬ。

代價

今一つ社會敎育の文書として要求すべき點は代價の低廉にある。代價の高いだけそれだけ讀者が少くなるのであるから通俗平易で興味があつて然かも代價が安いといふことであれば尤も恰好なものである、敎科書なれば無理にも買ひ無理にも讀まねばならぬが、社會敎育の方は全く讀者の自由になるのであるから文書を以て社會敎育を計らんとするものゝ苦心はこゝにある

此文書に對する社會敎育の注意は文書傳道の上にも應用せらるのであるから布敎上の著述雜誌に於ても此の苦心あらんことを望む。

十五　社會教育家の苦衷

口舌を以て社會教化を計らんとするには多くの苦痛がある。第一如何にして人を集めんかで、人が集らねば教ふることも出來ないのであるから此方策も講せねばならぬ。よし人を集めた所が興味がないと一度は好奇心で出て來ても二度とは續かぬ、ソコデ此頃は地方改良の講演又は衞生普及の演說、さては宗教の講演にまでも活動寫眞や幻燈を使ふ併しこれは婦女子には歡迎せられるが、少し理窟でも云はうといふ人間には一顧をも與へられない其中間を取つて講演の外に餘興を置き興味を添へるといふことが流行るが、これも亦考へ物で餘興が主となつて講演が客となり、若くは集合する人々が餘興に熱衷して肝心の講演に耳を假さぬといふことになる、幻燈や活動寫眞を以て說明するのも一策、餘興を用ふるも一手段だが、それよりも講演其者に興味を持たしむるといふことが必要だ。如何にして講演其者に興味を持たしむるといへば

講談者の注意

一　專門語を努めて俗語に化すること

二　適當なる譬喩を用ふること

の二を忘れてはならぬ。其上

三　興ふべきだけ感情に訴ふること

四　其言はんと欲する所を實生活に密接せしむること

等も心得ねばならぬ。高遠なる學理を通俗にいふといふことは一種の技倆で兎角學者は高尙に流れて俚耳に入り難い、俚耳に入り難くとも學者の本分としては差支ないかも知れぬが、社會教育家としては俚耳に入り易からしむるといふことが最大要件である。

俚耳に入り易からしむるといふことが要件であるが。あまりに之れに專らなると講演が俗惡になり卑近になり士君子の耳にするを好まざるやうになり强て興味を添へんとすると落語や講談のやうに社會教育たる根本目的を逸して興味のみのものとなり、本末を誤るに至る、こゝが社會教育家の最も苦心の存する所で、高尙では行かず卑近では惡く。興味がなくては行かず興味が

人格

あり過ぎても惡し。不即不離の妙諦これなかゝに通常人の企及する所でない。要は志こゝに專らにして熱誠を以て人を導くといふ一大決心の外はない。

以上は主として社會教育の動的方面に就て立論したので其靜的方面たる圖書館、博物館、動物園、植物園等の敷設に就ても論及する所がなければ完備するのではないが、これらは別種の問題としてこゝには唯だ其の動的方面に就て感じたことを述べただけである。

社會教育論終

明治四十三年四月十二日印刷
明治四十三年四月二十二日發行

讀書法奥附

正價金九拾五錢

著作者　加藤熊一郎
發行者　伊東芳次郎　東京市本郷區本郷壹丁目九番地

咄堂叢書

發行所　東京市本郷區本郷一丁目九　電話下谷一九三八　振替口座東京一七一　東亞堂書房

印刷者　山田英二　東京市小石川區久堅町百〇八番地
印刷所　博文館印刷所　東京市小石川區久堅町百〇八番地

不許複製

特約大賣捌　東京神田神保町　東京堂書店　名古屋本町　川瀨書店
大阪北渡邊町　杉本書店　久留米米屋町　菊竹金文堂

（東京本郷…太田製本）

東亞堂出版圖書大賣捌所

東京日本橋　至誠堂
同日本橋　北隆館　京都市
同日本橋　林平次郎　同
同京橋　目黒書店　同
同日本橋　文林堂　同
同京橋　前川書店　神戸市
同京橋　東海堂　名古屋市
同神田　上田屋　同
同神田　武藏屋　岡山市
同神田　勉強堂　廣島市
同神田　崇文館　同
同神田　二松堂　熊本市
同神保町　日本堂　同
同本郷　森江書店　鹿兒島

鷄聲堂　大分市
林書店　博多市
寶文館書店　長野市
東枝律書房　松本市
中外日報社　長岡市
寶文館支店　新潟市
小澤百架堂　金澤市
星野文星堂　札幌市
奥田金正堂　小樽市
友田書店　弘前市
積善館支店　青森市
長崎書店　宇都宮
金書堂書店　朝鮮京城
谷村書店　清國大連

甲斐治平博文社　大阪屋書房
西澤書店　日韓書房
水琴堂　内山集英堂
目黒書店　今泉支店
萬松堂書店　今泉書店
宇都宮書店　白鳥書店
富貴堂書店

東亞堂出版圖書大賣捌所

◎加藤先生の本領を知らんと欲する者は咄堂叢書を讀め!!!

加藤咄堂先生新著

新刊　咄堂叢書　第壹卷　**讀書法**

大判二百九十頁　クロス極美裝　正價九拾五錢　送料八錢

讀書の方法を知らずして書を繙くは、恰かも海圖を有せずして大洋を航するが如し、翌沒の危を蒙らずんば僥倖のみ、孟子の一書を讀んで悉く信ずれば書なきに如かず」と稱せるも、亦何ぞ此の意に外ならん。若し夫れ近時の如く新書の敎刊頻々として應接に遑まあらざるの秋に際しては、且つ特に讀書法攻究の切要を感ぜずんばあらず。本書は加藤咄堂先生が青年修學の前途を憂ひ、其の博大精該の蘊蓄を顚倒して傍らに古來苦學に依りて成功せし東西諸碩學の實驗說を參究して、如何にして書を讀むべきか、如何なる書籍を擇ぶべきか、如何にして其の得たる智識を統一すべきか等の諸問題に對し、痛切にして多趣味なる解決を與へられたるもの、天下篤學の士の時間と勞力とに一大經濟を與へたるもの、空前の學術修養法也。

近刊　咄堂叢書　第貳卷　**世態論**　全一冊（印刷中）

善く泳ぐ者は水の心を識る、世に處するの道を誤まらざらんと欲せば、先づ世態の何物たるを解せざるべからず、彼の學兎の秀才、一たび校門を去つて、忽ち社會の落後者たる所以のものは、豈實に活社會の實情と人心の機微とに逆ぜざるの罪にあらずや。本書は則ち加藤先生が、社會の構成、社會發達の沿革、社會組織の缺陷、社會進化の理論と實際、及び人情の反覆、人心の向背等を仔細に觀察し、浮世の表裏、世相の變轉等を總括別抉して、正面より、側面より、最も大膽に、最も精細に、現社會の忌憚なき解剖を試みたるもの、時に親を滅して斬馬劍を揮ひ、時に辟々として處世の妙論を語る、眞に痛烈骨を刺すの概あるのみならず、社會各方面の實情を活寫して、宛ら鮮血を以て描ける走馬燈を望むが如し、孫子の所謂「彼れを知り己れを知らば、百戰するとも殆ふからず」と稱せる所以を解して、克く世路の風浪と鬪ひ、以て成功の凱歌を奏せんと欲するの士は、先づ本書に依つて、眼前の强敵たる世態の眞相を觀破せよ。

◎咄堂叢書　第參卷　**宿命論**（近刊）　咄堂叢書　第四卷　**解脫論**（近刊）　咄堂叢書　第五卷　**以下隨時續刊**

加藤咄堂先生新著

◎加藤先生の才藻を知らんと欲する者は咄堂小品を見よ!!!

新刊 咄堂小品 第壹卷 自警錄

中判 二百卅頁 正價五十錢 送料六錢

「人に接する春風の如く、自ら腐しむ秋霜の如し」とは、豈修養の極致を道破せる達人の至言にあらずや。而かも加藤先生の自から警しむるや、嚴正卓厲、常に鞠躬如として寸時も安んぜるの觀あるは深く江湖の敬嘆せる所。且つ啻に自ら新たにする而已を以て足れりとせず、二六時中、教化傳道を維れ念として、文章に、講演に、諄々として後進を誘導して聊かも倦まず、眞に咳唾珠と化し、片言百世の範たるの概あり、今其の鑛粉雪の如き唾珠と、絢爛花の如きの快文とを輯めて本書を成す。逸話あり、奇聞あり、修養談あり、處世論あり、旅行記あり、讀書餘錄あり、感想錄あり、隨筆あり、立論縱橫、趣味津々、當に修養自警の好津梁たり。

近刊 咄堂小品 第貳卷 文字禪 (印刷中)

近刊 咄堂小品 第參卷 涉獵漫錄 (印刷中)

◎咄堂小品第四卷以下隨時續刊!!!

加藤咄堂先生名著

好評十二版 修養論

大判五百五十頁 總クロス頗莊麗 正價壹圓八拾錢 送料十二錢

修養は人生の一大事也。常に心を修養に存する者は向上し、怠る者は墮落せざるを得ず。修養あるは實に吾人人類の恩寵にして、又畢世の一大義務也。然かも新らしき時代には新らしき人物を要し、新らしき人物には又新らしき修養を要す、乃ち加藤先生の此著あるの所以にして君が深奥なる宗教上の造詣と、儒教、哲學、倫理等の諸家の學說を骨髓とし、且つ古今東西に亘りて偉人先哲が立志誓勵、以て人格鍛錄に努力せし、各種の趣味深き逸話史蹟を血肉として、圓融陶冶、茲に新たなる修養法を建設せられたるもの、之を小にしては齊家處世の妙契を悟得すべく、之を大にしては宇宙人生の大目的に暝合すべし、眞に吾人が修養の唯一路にして、又向上自彊の好指針たり。

東亞堂書房創業第五週年記念出版

修養會編纂 修養日記

總クロス堅牢美裝 中判五十錢 袖珍形四拾錢 送料各八錢

世に斯くの如く諸般の新機軸に富める日記他にありや？從來の日記の單に一種の備忘錄たるに過ぎざると反し、本誌は日々豫定と實行との二劃を設けて理想と現實との關係を對比せしめ、且つ世人が日常必須の諸規則法令及び種の便利なる一覽表は勿論、圖外には貴重なる和漢洋の金言と多趣味なる詩歌文章逸話等を配し眞に使用者をして一日記し始むれば終歲廢すること能はざるの興味と實効とを享受せしむ。若し失れ「月課豫定表」「功過格」「夙記表」「時間活用表」「收支整理表」「先哲年表」等は全く他日記類に見るべからざる本誌獨得の創案！加藤咄堂先生の「修養の心得」と題する萬人必誦の訓誡と相俟つて、懇切周匝宛ら恩師の愛弟を慈導するの概あり、克己心修養、意思鍛錬の實行的新成案！!

明治四十三年以降追年刊行

加藤咄堂先生名著

訂正
十二版
増補

冥想論

附「坐禪論」

大判貳百餘頁
正價五拾錢
送料六錢

本書内篇十三章、哲學、宗教、倫理、生理、詩美等諸種の方面に亘りて、品性修養の根底たる冥想の必要を敍し、其理論と方法とを詳説し、和漢洋古今先覺の思想を提供し來りて引證該博、また餘蘊あるなし、外篇二章禪學小史、冥想雜感外に坐禪論等共に修養を心掛くる者には缺くべからざるの指教なり。（萬朝報批評）

冥想論の一篇字々として金ならざるはなく、句々として玉ならざるはなく、眞に近來快心の著なりと云ふべし。（大阪毎日新聞批評）

好評
七版

人格之養成

大判百八十頁
正價五十錢
送料六錢

人の本性より研究して古代の善惡觀を脱き人格の意義及び修養法を詳論して人格養成の必要と方法とを敎へたるものにして著者は其論據を哲理に置きたるが爲めに説く所頗る幽玄の趣致あり。（國民新聞批評）

「人とは何ぞ」に筆を起し古代民俗の人類觀、人性善惡説、人の價値、近世科學人類觀、人格の意義、人格の根底等を詳論して最後に養成法に移り修養の時代、常識の涵養、趣味の啓發、意志の鍛錬、處世と人格とを述べたり、著者獨特の筆法讀者を警醒する所多し、附錄なる讀書と自然、亦是有要の文字。（中央新聞批評）

加藤咄堂先生名著

好評
五版

修養雜觀 朝思暮想

中判三百餘頁
正價六拾錢
送料八錢

（朝思の一節）憐なる哉、今の青年、生活の爲めに業を求むることを知つて、道の爲めに求むるべきを知らず。滔々利に走りて唯目前の事を企畫して其の根本を逸することと……

（暮想の一節）人生に於ける事業もとより少からず。されど唯だ赫々の功を社會に立つるのみを以て大事業と見ることなかれ。沈思冥想、我が本來の心性を徹見し、其品性に培ひ、其人格を養ふ亦實に大なる事業たるなり……

好評
參版

修養資料 はなし草

中判頗美裝
正價四十錢
送料六錢

此書篇を分つと五「雨窓閑話」の奇警なる「文談武談」の壯烈なる「夜雨蕭々錄」は一讀悚然たる幽靈奇聞を語りて、附するに著者が得意の幽靈論を以てし「茶榻禪話」は浩蕩飄逸なる超俗的逸話を述べて、字々清風を生ずるの思ひあり、若し夫れ「修身教材」に到つては、則ち修養自警の絶好資料！ 倶に文章演説坐談等の新語材として與趣津々眞に噴飯雨居の好伴侶たり。

加藤咄堂先生名著

好評五版

雄辯法

大判二百廿頁
製本七十錢
特送料各五十八錢

（報知新聞批評）著者は居士佛教家中第一流の雄辯家也本書は修辭學や因明や西洋論理學や著者の經驗抔を基礎として雄辯法の說明を試みたるもの文辭簡明にして中々面白し。（大阪每日新聞批評）本書は雄辯法の何たるかを組織的に簡易に說明して先づ其要綱を提示し得たる者なるが其引例の實際的にして、興趣深きもののみを選べる著者の用意大によし。（國民新聞批評）著者は雄辯法を實際に行ひつゝある人なれば其說く處も實際に出で經驗より來りしもの極めて多し演說說敎家は一讀すべき書なり。

近刊

新撰靖獻遺言

（印刷中）

「靖獻遺言」は英雄の學也、志士の書也。大丈夫の經典也。幕末勤王の諸豪傑、維新鴻業の諸元勳、乃至在朝在野の諸侯伯等、苟くも我が社會の上流に榮居して嶄然頭角を擡んづるの士は、壯時皆悉くこの書の感化を蒙りて、奮然蹶起せし者に非ざるなし。假令賴襄の日本外史は之れを讀まずとも、淺見綱齋の「靖獻遺言」は必ず一讀せざるべからずとは、士人の間に於ける當時有力なる敎育論たりしにあらずや。加藤咄堂先生常に現時青年者流の士氣沈滯せること甚しきを患ひ、この書を以て時弊を救はむと欲するの念禁ぜず、其深邃の蘊蓄を傾注して「靖獻遺言」の骨肉に附するに、最近文明の新繪神を以て、愛憤の志、慨世の氣相迸發して深刻痛烈、一卷を前後の二篇に分ちて「前篇」は專ら綱齋が撰に則り懇切周詳なる講解を加へ、「後篇」に至つては即ち先生自ら卓拔の見を以て本邦建國以來の各時代を代表せる英雄偉人十數家の命辭を選し、本文の一致を以て斬新警拔の評を下し、當時の實情、諸偉人の逸話等を博引し俱に君が獨得の絕倫卓拔の歷史及び風潮、即ち新撰の名ある所以にして、離して之れを讀む時は實に和漢上下の諸偉傑が趣味深き列傳にして、偉傑なる一卷の東洋興亡史たるに足れり。發憤忘食、自己を革新し、鍛錬し、以て大丈夫の錦袍を着けむと欲するの士は、乞ふ本書を三讀せよ。

加藤咄堂先生
大住舜先生共著

○常識之基礎

菊判 六百貳十餘頁 圓二錢 價送料五錢

▲最新案進化對照圖五葉挿入▼

大住舜先生著

○習慣の勢力

菊判 二百十六頁 五錢 價送料五錢

近刊（起稿中）

德富蘇峯先生、大町桂月先生、加藤咄堂先生、山路愛山先生、松村介石先生 序

○現代名士修養百話

菊池曉汀先生編

天書六料閣藏十八版 價送料十錢

都下の三大新聞は本書を評して（萬朝報）今日の時勢是あらざるべからずして未だあらざりし書也……現代の人として必ず有するを要する智識を總じて供給したる也、全書を宇宙篇、地球篇、生物篇、人類篇、社會篇の五篇に分ち……誰も適し重寶此人の讀物として（國民新聞）各階級の人に適し重寶此人の讀物として（國民新聞）各階級の人には處世上緊要なる常識を養成する上無し（東京朝日新聞）上に於て頗る補益あるを疑はず（讀了せしめんとしたる用意が面白し……且巧に應用して倦怠なく讀了せしめんとしたる用意が面白し……且つ卷尾に索引を附して百般の疑問を此書中より繰出すに供したるは殊に便利也」と稱讚せり以て出版界空前の好著たるを知るべし

修養は吾人が終生の一大事、何の時に至るも之れを廢すべからず。今安部磯雄、尾崎行雄、斯波貞吉、大町桂月、鹽井雨江、東海林蘇雨、德富蘇峯、佐治實然、建部遯吾、本多靜六、木村鷹太郎、村上專精、山路愛山、黑岩周六、加藤咄堂、三宅雪嶺等の諸名家が修養處世の金科玉條を叩きてそが實驗上の成業秘訣を詳分す、品性修養人格鍛錬の無上訓誡たり

文學博士 遠藤隆吉先生序

○荻生徂徠論語辨

天書閣藏五十六版 價送料六錢

文學士 祥雲碓悟先生校訂

論語が千古不易の修養書たるは世已に異論なし、而かも其の意義や深淵、其の文辭や幽婉、近時これが講解を試むるもの汗牛充棟も啻ならず、雖も尙且つ學者をして亡羊の嘆を發せしむること能はざるは豈に昭代の痛恨事にあらずや「論語辨」は徂徠先生の遺著にして當に遺憾の缺陷を補ひ得て餘あるの一大珍書。書中訓讀と、講義との二項を設けて赤子を導くが如き、而かも森嚴犯すを施し溫言宛も父母の正鵠、語句平明、且つ全部振假名を施すの中に、釋義の正鵠、語句平明、且つ全部振假名を施すの中に、而かも森嚴犯すべからざる聖人の偉大なる人格を彷彿せしむるの概あり、今茲に祥雲碓悟先生の鑑なる參訂を經て復刊す。眞に初學道に入るの好指南也、幸に天下志ある士の一案を俟つ。

德富蘇峯先生序

○修養逸話 偉人之風化

鹽見戈山先生著

中判全一冊 價送拾六錢

夫れ水の流れを示すものは、其水面に浮べる葉の一片なりとす れば、偉人大人物が赤裸なるの人格の眞價を語るものは、即ち其無意の間に於て發せらるる片言隻語に非ずや。本書は天地を趨本深き黄の四篇に分ち、古今東西に亘りて偉人先哲が、諸種の逸話を集め、著者が獨特の論評を加へたるもの、德の蘇生は一筆端自在快劍陣を斬る、以て發せられたり。巨人達人が絶大なる感化を被りて、修養せむと欲する士は、乞ふ此書を三讀せよ。

○自修論

姫河原無鳴先生譯

大判全一冊 價送十八錢

全一冊(印刷中)

足立栗園先生著

○膽力之錬養

大判全一冊 價送十五錢

夫れ大丈夫の立つて天下に事を爲さんと欲するや、其の最も肝要なるものは豪邁不屈の大膽力に非ずんと何ぞ！高才あり、博學あり、衆能あり、膽力なくして、特た何事を成し得ん。古來偉人傑士の英喫すべき大事業の牛面は、膽力の活歷なり。決して過言にあらず、膽力の錬養、豈に足立先生の多志ある者の冷眼輕視するを得べきや。之れ先生の苦心を費して此名著をなせる所以にして、又何人と雖ども必ず本書を一讀せざるべからざる理由也。

東京血液療院呼吸操練部顧問 熊代彦太郎先生著

○心身鍛錬 深呼吸健康法

大價送 判全十五料 一冊 錢五十八錢

活潑の精神は健康の身體に宿る！天下深呼吸の如く簡易にして、廉價にして、而かも、身體の諸機能を强健ならしめ……元氣を充實し記憶を旺盛にし……思想を整一し精力を集中し……膽氣を擴大する等の偉効あり、健康增進の妙法他にありや？且夫れ本書の價値多き所以は、所謂机上の空論に非ずして、言々著者が多年の實驗に準據せし點に在り矣

足立栗園先生著

○心身鍛錬 養氣法

大價送 判五十二料 百五十頁 錢六錢

（報知新聞批評）緒論に元氣と精神、生命と身體の關係を說き第二編に於て養氣と振生第三編に於て養氣法を論じ第四編に於て心身鍛錬の實驗として東西古今に亘り三十三家の所說を擧げ第五編と して養生訓を載せ附錄に飲食と喫煙と題して泰西十大家の實驗を揭ぐ心身鍛錬の法を說く至れりと云ふべし殊に內觀を說く所頗る傾聽既味すべし

（讀賣新聞批評）養氣の一事は古來聖賢の尊ぶ所にして又事業家の大に努むる所也蓋し之れ無くんば人に何等の勇氣なければなり

愛生病院長醫學士 木村麟太郎先生校閲

○腦力養成法

漆山又四郎先生著

總價送 かな四十五料 付錢六錢

文明の競爭は智力の競爭也優勝劣敗の分るゝ所一に腦力の强弱如何に存す腦力の養成豈忽諸に附すべけんや本書は卽腦神經衰弱其他諸種の腦症の治療法より腦力及び記憶力增進の原理方法を詳叙せる者如何なる階級の人士を問はず必ず繙讀の勞を吝む可らず

堀內新泉先生著

○時間活用法

大價送 判六料 美十八錢 製本錢

（報知新聞批評）時は是れ金の貴きより以上に道破して時は是れ生命と做し人生の如何に時間の價値大なるかより時間を使用する心得たば數十百項に剖して丁寧深切に記述したり時の貴ぶべきこと時を浪費すべからざることは何人も之を言ふ處なれども之を知りて行ふ者尠く茫に蹉跎困頓秋風霜鬢を吹くに及んで悔恨するもの多き時に於て斯る適切眞摯なる書の出るは喜ぶべし

（日本新聞批評）金を浪費せぬ人はありとも時間を浪費せぬ人は殆ど無く紀律の慣習なき日本人は最も意を茲に致すを要す是れ本書の必要なる所以

經世學人氏著

○生活問題の解決

十月上旬發賣

本書は經世學人とは世を忍ぶ假りの名、まことは目下實業界の切れ者で、若い時分には隨分つらい勞働などをして苦學をもされた者だが、いろ〳〵世路の險難を經來つて、今日の位置に達せられた某君が、其經驗の餘に得られた世渡りの秘訣を披瀝せられたもので、決して机上の空論なぞではないのであるから、世の人を益することは鮮少でないと信ずるのである。

大内青巒居士序

○禪と修養

釋悟庵師著

大價送料 判二百十八頁 二五錢

（萬朝報批評）禪を唯靜止唯消極なりと爲す世の誤解を破し其靜動兩面を詳說し物質精神南方面より束縛を脫する法を敎へ宇宙の本體は卽ち我が本來の面目なる事を示し延いて人生の目的價力の成處世の秘訣等に論及すること何ぞ物たるかを知らざる者も熟讀玩味するうちに自ら無自性の妙を認むるを得む

（讀賣新聞批評）枯木禪野狐禪の難病を救濟する爲に本書を公にしたりと言ふ著者の識見は極めて明快に書き下されたり云々

洪嶽禪宗演禪師題詞
無邊俠禪渡邊子爵題詞

○禪と活動

破魔禪居士著

大價送料 判四百十五頁 四料 十六錢

（萬朝報批評）察するに著者は現今禪を學ぶ者が多く厭世に陷る慨概せる者の如く大に靜中の動換言すれば禪の積極的活動的方面を慫慂せんと努めたるものゝ如しされば先づ卷頭より「大勇猛心」「聖諦第一義」「靜中動」「禪體になれ」「常軌を逸する勿れ」等の數章に亘りて詳細に活動的禪の如何なるかを述べ以下九章に亘りて古來活動的禪の如何なる人になりて活動せしかを歷述せり又一般宗敎活動し如何なる類と全く其類を異にし明快縱橫剛蕩豐富にして再讀するに足る

文學士 沼波瓊音先生校閱

○俳味禪味

宮垣四海庵先生著

中價送料 判四百十四頁 四料 十四錢

俳味とは如何？ 禪味とは如何！ 蓋禪味を解するの士にして亦始めて俳味を談ずべし。本書は俳禪芭蕉により建設せられ、波吹せられたる俳味禪味の骨髓を明にして、閑寂趣味の福音を宣傳し、極端なる物質萬能主義に塗毒せられたる現代の人心に一大覺醒を與へ、以て虛飾を去りて簡易に就かしめ、枯淡の生活をして趣味を生ぜしむ。近時思想界の新章命見たり。

波邊國武氏
黑岩周八氏題詞
佐々木信綱氏題詠
三宅、齋藤兩氏祝

○動中靜觀

萬朝報記者 茅原華山先生著

中價送料 判三百廿六頁 四料 十六錢

華山先生の文は世既に定評あり西園寺陶庵侯は「恰も蘇老泉の文を讀むが如し」と賞せられ黑岩涙香先生は實に「其趣味の博きこと時人及ぶ者少し」と贊論せられたり本書は先生が半世の思想史にして又觀察史也籍を分つこと八自然を觀察し、哲理を談じ、人物を評し、修養を論じて風發卓厲、詩華煥發近時出版界の一異彩たり敢て大方の瀏覽を俟つ。

破魔禪居士著

○偉人修養史

大價送料 判二百十六頁 五料 十六錢

「剛膽なる所を學ばんと欲せば、先づ英雄の爲せる事跡を觀察し且つ其の事業を既味して、必ず身を以て其事に處し、安心の地を得べし」とは近代の巨人西鄉南洲翁の箴言にあらずや。本書は即ち古來偉人英傑が以て偉人たり英傑たるに到りたる條發自强の方法を研究し其崇拜すべき言行を錄して人格鍛錄の活模範を示したるもの來偉人英傑が以て偉人たり英傑たるに到りたる條發自强の方法を研究し其崇拜すべき言行を錄して人格鍛錄の活模範を示したるもの

の音に立志發奮の絕好刺激たるべし而已ならず以て吾人の意志を發固ならしめ剛膽不撓の大勇猛心を發成せしむるに足る

臼田石楠先生編

○西鄉南洲言行錄

大價送料 判二百十六頁 六料 十六錢

（每日電報批評）西鄉隆盛は後世に懸りて一大奇蹟なり彼が偉なる生涯の出發點は本邦歷史中の大革命なる維新の風雲に乘じて其趣味多き言行の終爲は薩摩半人に依り滿身の脚力を以て大悲劇を演じ即ち城山の自刎に臨み眼色を以て諸人に所に非ず、此書は此偉人三條岩倉、木戸、大久保の一世を烟滅し及ぶ所に非ず、此書は此偉人の生涯を縱橫に寫し剩さへらんとするもの、如く材料を汎く蒐集して傳言行の分類に收め英雄の尊記として最も鹽梅の宜きを得たりと云ふべくたゞに青年子弟の好讀物たるのみならず明治維新史の一面として世人の一讀すべき良書なり

藤田長江先生編

○福澤翁言行錄

（橋本書店藏版）

大價送料 判廿一全五四錢

本書は我が新文明の一大恩人として最も光彩ある生涯を有せし平民的大偉人福澤翁の敬墓すべき言行を錄してその獨立自尊主義、實學主義、常識哲學を鼓吹せしもの人格修養の活模範たり

萬朝報記者 茅原華山先生著

○世界文明推移史論

大價送料 判五全一十八冊錢錢

（國民新聞批評）篇を分つ五、日本と亞細亞文明の東漸、歐洲文明の西漸より日本文明の西漸の新勢及び交戰に入り太平洋と武裝的商業關係を叙して日本は韓清西伯利を文明化し進で巴里倫敦の惡人町迄も感化するの覺悟あるべき也と啓發するに足るもあり天馬空を行くが如き爾り蓋し一代の結論縱橫宛ら行くが如き大問題を征服せんと試たる大膽に而て喫驚の辭を惜む能はざる也

耳目を著者が此くの如き

足立栗園先生著

○古英雄の生活觀

中價送 判三料 全一冊十四錢

本書は報國。正成。秀吉。清正。家康等の偉人英雄五十餘家が一勝一敗具さに世路の險難を歷來って後始めて悟入し得たる實驗上の生活觀を尋究して吾人が處世の活教訓を示し逆境を去て富貴に赴かしむる生活問題解決の絶好餘師たり。

元政庵十二世法嗣故毘尼薩臺巖師校閲

○深草の元政

青山霞村先生著

大價送 判七料 頒美十八本錢

佛家は釋尊の後身として其德を仰慕し、江湖は士人石井某が名妓高尾との情事に因りて佛門に歸せしものと傳ふ、世に興味深きは夫れ元政の傳說に非ずや。本書は此道骨仙風の一奇僧が眞面目を尋究して吾人が修養解脫の先達を示せるもの開吟高風の好薬適たり。

文學士 幸田成友先生著

○大鹽平八郎

菊判 價送 四百五十頁 圖壹十拾二錢

洗心洞劄記の著者にして、又天保騷亂の主謀たる大鹽中齋は、抑も英雄か、將た神仙か、將た又一介の野心兒か、乞ふ本書を繙いて此異色ある英傑の眞風骨に接せよ。

文學士 幸田露伴先生 笹川臨風先生序

文學士 沼波瓊音先生著

○模範名家俳句大成

中價送 判壹料 函圖入貳拾八錢

本書は俳諧創始以來近世に及びて、守武、宗鑑、貞德、宗因、芭蕉、鬼貫、太祇、蕪村、一茶、子規、紅葉等總計壹百五家に就き、其模範とすべき佳吟名句を選みて、之を四季に分ち、更に各者の出處、閥歷、著書專業等を擧て諸家の風格特調を明にせるもの、洒脫なるあり、莊重なるあり、驃逸なるあり、沿蕩なるあり、宛ら古今の俳仙を一堂に會して一大雅莚を張るの觀あらしむ。實に本書は上下四百餘年間に亘れる、最も大規模なる「俳句選」にして又「日本俳諧史」を兼ねれ且つ「俳家人名辭書」たるの利便をも有する俳人必携の新寶典也。

報知新聞記者 熊田葦城先生著

○少年武士道 第一

三浦北峽先生畫

中價送 判四料 美本十六錢

（報知新聞批評）本書は少年の志氣を鼓舞し忠勇義烈の精神を煥發せんと欲するものなれば少年の好伴侶として家庭必須の讀物たるべし

（福岡日々新聞批評）古來十六歲以下の少年の武談を美文的に書いたもの總て三十五人各人の小傳と訓戒とを附し又上欄に註解を添へて少年讀者の便に供して居る氣のきいた讀物である

（北國新聞批評）偉人烈士の少年時代の逸話を收めたるもの皆以て少年子弟の元氣を鼓舞するに足るべし

報知新聞記者 熊田葦城先生著

○第二少年武士道

三浦北峽先生畫

中價送 判二四料 百廿六頁錢

（大阪毎日新聞批評）本書は我國の史乘に現はれたる英雄豪傑四十名を選び其少年時代の勇武壯烈なる行爲を叙せるもの

（東京二六新聞批評）文章の流暢と內容の豐富なる事に於て少年子弟を魅著せしむるに足らん

（小樽新報批評）採って家庭花話の資料と爲すに足る

堀內新泉先生著

○立志小說 全力の人

大野靜方先生畫

前後送 篇篇料 六六各十八 五十錢錢

獅子の兎を搏つや其全力を用ふと人生の事と雖ども亦全力の人ならずして誰か奚ぞ成就すべけん、嗚呼全力の人なる哉、偉業を成すべく赫々たる人なる哉、全力の人岩井儀一の剛健なる意志と、高潔なる心操とそが世路の險を歷幽を窮めて後始めて贏ち得たる成功の活教訓とは著者が靈犀の詩筆を俟つて勞れたる者には新たなる活力を與へ、敗れたる者には溫かき慰安を與へ、以て讀む者をして、感奮蹶起せしめずんば已まざらむとす。近時立志小說中の巨擘たるもの……

堀內新泉先生著

○人格と運命

大價送 判五料 二百十六頁錢

（萬朝報批評）人の社會に處する要訣より如何にして人格を高むべきか如何にして運命を造るべきかを說きたるものにして著者は由來小說を以て世に聞えたる士なるが此種の文體にも自ら其丁寧なる筆力を見る

（報知新聞批評）所謂世に處する新活法を平易に說きたるものにて近來盛んなる人格の修養には好適の研究材料たり

幸田露伴先生著

○工藝新意論

菊判総布表紙美本定価送料未定

近刊（印刷中）

幸田露伴先生著

○新訂曾我物語

近刊印刷中

曾我物語が我が武士道の精粋にして且つ本邦復讐談中最も規模濶大に、波瀾百出、慷慨悲壯、一讀血湧き肉動くの妙あるは、兒童走卒と雖ども熟知せる所。今現代の文豪露伴先生によりて讀者の案頭に親炙せむとす、眞に文壇稀に見るの一大快舉！

文學博士 芳賀矢一先生序
文學士 笹川臨風先生序

○新訂義經記

御橋雩風先生校註

菊判美術製本定価送料未定

近刊（印刷中）

澤庵禪師細鈔

○澤庵禪師老子講話

森大狂居士嚴訂

菊判壹圓送料金四拾錢美装本定価送料八錢彩參錢

老子の一書言々宇宙の祕を闡き、句々人情の微を穿ち、幽玄高妙眞に東洋思想界の珍たり。孔子曾て評して云ふ「老子猶ほ龍の如き乎！」と。本書は龍の如き老子の教訓を禪門近世の大德澤庵禪師が卓拔の見を以て平易簡明に講解せられたる希書にして、禪の妙と老子の玄と相迸發して眞に龍の雲を得たるが如く、雷電を叱咤し、乾坤を呑吐するの感あり。人事紛々俗務蝟集の中に沒頭するの士一たび本書を繙かば、神韻縹渺として心胸自ら快闊なるを得む。今附するに禪林の祕書「太阿記」を以てす、俱に精神鍛錬の絕好鉗鎚！

幸田露伴先生著

○潮待ち草

附錄『小說土偶木偶』

大判八十頁製本五錢送料八錢

（太陽批評）一讀するに此書程善く著者の性格を表したるは稀なるべし—吾人は本書が單に文學的産物として價値多きを語ると共に青年に發する教訓書としても乾燥無味の修身書よりも遙に效多き揚言して憚らざるなり（中央公論社批評）殊に土偶木偶は著者の詩情の決して老いざるを見るべく其五回のさぎれ文の如きは絕世の妙文金色夜叉の宮の書簡の如きは到底比べものにならぬ心地す（大阪毎日新聞批評）文學談あり處世談あり史談ありとりどりに愛でたからざるはなし

（讀賣新聞批評）露伴氏の傑作中の傑作と稱せられたる一口劍。（風流佛）未練の三篇を合したるもの（萬朝報批評）今日見るも流石に想華の人を魅するものあるは偉なる哉

（國民新聞批評）殊に文章の精嚴にして崇重なる而も洒脫にして脂粉の氣を脫せる共に及び易からず著者の出世作として明治文壇の產物として讀んで多大の興味あるべし（日本人批評）「風流佛」の超脫「一口劍」の莊嚴其藝術家の藝術に對する熱烈なる信念を理想化して描寫殆んど神に迫る

幸田露伴先生著

○小說はるさめ集

菊判美本定価送料七十八錢

頭大公の生涯は眞に努力奮鬪の連續なりき、數奇なる運命の手は、幼にして斬らるべかりし英雄を伊豆に送りて更に失戀喪兒の苦がき慘雨を降し、將に枯れなむとせし野心の萌芽を培ひて、疾風迅雷、悠忽として霸業創建の大活劇を演ぜしむ、露伴先生此古英雄が埋沒せる個人的事蹟に興味を有せらるゝこと久しく博參考證斯の一篇を成す、文詞渾麗、理趣精徹、近時文壇、史壇の一偉觀たり

幸田露伴先生著

○新作賴朝

阪井紅兒先生畫

大判一表裝圓十八料送價送

雅典錢

幸田露伴先生著

○註釋一日物語

沼田穎川先生註

金四十四錢送料入美本定價

（此一日の一節）四行かすかに眼を轉じて、聲する方の闇を覗へば、ねば玉の黑きが中を、朽木のやうなる光りもてる霧とも雲とも分からざるもの仄白く立ちまよへる上に、其樣異なる人の丈い高く痩せ衰へて凄じく……

（彼一日の一節）月はやがて沒るべく四に廻りて、御堂に射し入る其光り水かとばかり冷かに、端然として合掌せる二人の姿を浮ぶが如くに、御堂の闇の中に照し出しぬ。

佐藤仁之助先生著（東京開成中學校國語漢文科講師）	○受驗參考 國語漢文要語詳解	全洋二冊裝	國語及び漢文の故事熟語詳解	正價(各)四十錢 送料(各)八錢
佐藤仁之助先生著（東京開成中學校國語漢文科講師）	○受驗參考 日本文法解義	全洋一冊裝	日本文法の要領を明快に詳述す	正價四十五錢 送料六錢
佐藤仁之助先生著（東京開成中學校國語漢文科講師）	○漢字異同辨及用法	全金一字入冊	漢字の異同及び用法を懇述せり	正價二十錢 送料二錢
佐藤仁之助先生校補 東亞堂編輯所編（東京開成中學校國語漢文科講師）	○國語異同辨 附假字用法及誤り易き動詞語尾區別表	袖珍一冊	國語の異同を辨じ假名遣に及ぶ	正價十五錢 送料二錢
大町桂月先生著（文學士）	○作文法講話	全洋一冊裝	作文法の秘訣を說きて懇切明快	正價三十錢 送料四錢
佐藤仁之助先生編（東京開成中學校國語漢文科講師）	○新案百人一首通解	全洋一冊珍	百人一首の多趣を斬新なる解釋書	正價十錢 送料二錢
高濱虛子先生編	○新寫生文	全金一字入冊	虛子。四方太。節。鼠骨。四家の傑作集なり	正價五十錢 送料八錢
町田柳塘仙史著	○漢詩講話 附（俳句と漢詩）	全美一洋一冊裝	漢詩作法の捷徑を述て趣味津々	正價五十錢 送料六錢
文學士 武島羽衣先生序 慶應義塾普通部講師 志賀華仙先生著	○和歌作法	全美一洋一冊裝	敷島の道に遊ぶ者の絕好指南車	正價三十錢 送料四錢

文學士 佐々醒雪先生序 沼波瓊音先生著	○俳句講話	全美一製冊本	作句の秘訣を說きて評釋に及ぶ	正價四十錢 送料六錢
文學士 久保天隨先生序 沼波瓊音先生著	○俳句研究	全美一製冊本	俳句講話の高等科也一讀絕俗塵	正價四十錢 送料六錢
文學士 沼波瓊音先生著	○俳句階梯	全美一製冊本	俳界に遊ぶ懇切なる道知るべ也	正價三十錢 送料四錢
故 文學士 三宅嘯山師編著 沼波瓊音先生校訂	○俳諧古選。新選	全美一製冊本	有名なる俳書古選新選を合本す	正價四十錢 送料六錢
秋元蘆風先生譯	○シルレル詩集	袖珍一冊全	シルレルの傑作を譯して頗優婉	正價四十錢 送料四錢
山口小太郎先生序 秋元蘆風先生著	○シルレル研究 鐘の歌評釋	全金一字入冊	名詩鐘の歌に關する唯一の評釋	正價七十錢 送料四錢
東京高等師範學校講師 戸川秋骨先生著	○英文學講話	全洋一冊裝	英文學の要領を簡明に紹介せり	正價廿五錢 送料四錢
野口米次郎先生著	○邦文日本少女の米國日記	全頗一美一冊本	同胞の世界に誇示すべき大傑作	正價七十五錢 送料八錢
楓村居士新著	○傳奇小說 俠雄錄	全美一製冊本	一讀血湧き肉躍るの痛快小說！	正價六十錢 送料八錢

理學士藤田外次郎先生校閲
鹿田久村先生編
○百科ポケット顧問
新智識を網羅せる小百科辭典！
和全一冊珍
正價三十錢 送料四錢

法學博士松波仁一郎先生序
明法學士原田定造先生著
○手形取引の顧問
實業家必備の信賴すべき顧問役
全金一字入
正價八十錢 送料八錢

張廷彦先生校閲
張、宮澤兩先生著
○官話速成篇
支那語は話の完全なる新教科書
全洋一冊
正價卅五錢 送料四錢

張廷彦先生校閲
張、宮澤兩先生著
○東語速成篇（官話速成編總譯）
速成篇の總譯にして獨習に便也
全洋一冊
正價十五錢 送料二錢

德富蘆花先生序
角田浩々歌客先生著
○時文評論理趣情景
著者が獨特の社會觀と文藝論集
全洋一冊
正價四十錢 送料六錢

田中渡邊兩公題
龜谷天尊先生著
○賜天覽瑤琴
紀行漫錄哲理論等共に詩趣橫溢
全頒美一冊本
正價四十五錢 送料六錢

坂田實先生著
○無宗教者の眼に映ずる人生論
警家なる著者の大膽なる人生觀
全洋一冊
（參陽社藏版）正價二十五錢 送料四錢

ドクトル富士川游先生序
澤田順次郎先生著
○科學より見たる男女の關係
自然より見たる赤裸々の男女觀
全洋一冊
（鼎立社藏版）正價卅五錢 送料四錢

大日本催眠學會々長
小野福平先生著
○催眠術治療精義
催眠術を醫術に應用せる新研究
全金一字入
（催眠學會藏版）正價九十錢 送料八錢

加藤咄堂先生序
本多五陵先生著
○健康秋序朝起の勸め
朝起の偉効を說て其方法を敎ふ
全洋一冊
（修養閣藏版）正價卅五錢 送料四錢

藤田日東先生著
○最新獨學法
最有効なる勉强法を述べて懇切
全洋一冊
（修養閣藏版）正價四十錢 送料六錢

文學博士三宅雄次郎先生序
中央新聞主筆惠美光山先生著
○人格修養の基礎
人格修養の根本問題を解決せり
近刊
印刷中

文學士尾上柴舟先生述
○新派和歌講話
先生獨特の作歌法を說きて痛快
近刊
起稿中

文學博士芳賀矢一先生校閲
文學士沼波瓊音先生新著
○徒然草新釋
斬新にして近代的なる徒然評釋
近刊
起稿中

文學士沼波瓊音先生著
○默想の天地
瓊音先生が內的生活の新產物！
近刊
起稿中

東亞堂編輯所編
○最近男女學校案內
最も責任を重じたる勉進學案內
近刊
印刷中

大場健兒先生著
○どもり矯正の實驗
著者が吃音を矯正したる實驗法
近刊
正價廿五錢 郵稅四錢

高濱虛子先生著
○俳諧趣味
君が獨特の俳趣味を說ける新著
近刊
起稿中

◉誰れが讀んでも面白き驚心駭目の一大奇書!!!

伊藤痴遊先生新著

福本日南先生序
長谷場純孝先生序

賜天覽
西郷南洲（前篇）（續篇）

美裝三百九十頁
正價九十五錢
送料八錢
美裝三百八十頁
正價九十五錢
送料八錢

▼本書の光彩▲

前篇には大山元帥、伊東大將、東郷大將三閣下の證明ある「南洲翁の眞影」を掲げ、又た續篇には長谷場衆議院議長閣下の珍藏に係る「南洲翁の遺墨」三面を附す。本書は曠世の英雄西郷隆盛翁が小說よりも奇なる一代の事蹟を活寫し、之に配するに東湖、松陰、東行、龍馬、景岳、海舟等の諸傑を以てせる小說の波瀾百出、痛快悲壯、眞に明治の水滸傳と稱すべし。世に南洲翁を詳せる者尠からずと雖も、此書の如く詳細にして且つ正確なるは未だ見ざる所にして、傍ら維新革命の際に於ける驚天動地の大活劇を精寫して、一讀血湧き肉動き、殊に翁が少時の艱苦衷を細叙せる條に至つては即ち好箇の立志小說!! 偉人が崇高なる大人格は幾度の後尙は人をして奮起せしめずんば已まざらんとす。而かも今や續編成つて談は益々佳境に進み、當に筆端紅炎迸り、紙表腥氣漲るの槪あり、宛然是れ血を以て渲彩せる活動寫眞を展觀するに異らず。著者が演壇上の妙技を讃嘆せるの士は、本書に依て又其豪放なる筆力に醉へ。

近刊
（終編）西郷南洲（印刷中）

本書は旣に前篇、續篇を世に出して、好評嘖甚、江湖の歡迎湧くが如くなる痴遊先生が西郷傳の最終編にして、南洲翁が生涯中最も光芒焰彩に富める絕佳境！即ち明治政府新設の鴻に翁が大手腕を發揮せし得意の最絕頂より征韓論の議敗れて故山に歸り、途に三千の健兒に擁られて悲壯慘目、而かも事志と違ひて失意の奈落底に陷り、悲哉其蓋世の雄軀を城山の土に埋むるに終るに到る、實に壯烈鬼神を泣かしむるの顚末を詳叙し、更に附するに翁が終世の逸事及び少時の立志談等を以てせるもの、著者が筆致は此の篇に入りて益々絢爛の妙を加へ、活けるが如き偉人の大人格は、躍如として紙表に生動して、眞に咄々人に迫るの思ひあり、前篇及び續篇と共に近時稀に見るの痛快文字也。

◉讀む度び毎に品性を養ふ破天荒の偉人傳!!!

35

8
770

330
8

101504−000−7

330−8

読書法

加藤　咄堂／著

M43
EAA−0064